

# TRIO

三重の文化・社会・自然

三重大学大学院人文社会科学研究科 地域交流誌 [トリオ]



Vol.14

ISSN 1345-5079

特集

1

鼎談

## 三重に育った人文学

### 人文学のおもしろさ

特集

2

## 鳥羽市

### 三重県の研究



鳥羽春祭り(天山祇神社)  
”獅子と天狗の舞“

# TRIO

Vol.14

CULTURE, SOCIETY and NATURE in MIE  
published by Graduate School of Humanities, Law and Economics, MIE UNIVERSITY, Japan.

<http://www.human.mie-u.ac.jp/chiiki/trio/>

トリオのバックナンバーをご覧いただけます。

先日、卒業生と定期的に行っている読書会で、『見えない雲』（グードルン・パウゼヴァング著、小学館文庫、二〇〇六年）という本を取り上げた。チェルノブイリ原発事故の翌年に発表された作品で、ドイツでは四半世紀も読み継がれているという。あるドイツの原発が爆発事故を起こしたという設定で、パニックに陥る人々の様子や被曝者の悲惨な状況などがリアルに描かれており、ドイツの原発運動に大きな影響を与えてきたとも言われている作品である。本書の中で特に印象的であったのが、パニックに遭遇し実際に被曝した主人公の十四歳の少女（ヤンナ・ベルタ）と、バカンスに出かけていた祖父母との会話を描いたシーンである。現実を知らない（見ようともしない）祖父と、現実（原発事故の危険性）を知っている（身をもって体験した）主人公との認識の隔たりが対照的に描かれている。原発ありきの認識に凝り固まっている祖父の眼には、原発事故の詳細な事実や危険性を伝えること自体が集団的ヒステリーであると映ってしまい、真実が全く見えなくなっている。一方、主人公の少女は、愛する家族の死に直面し、自らも被曝したことにより、否応なく真実に気づくことになる。傷つき、悩みな

がらも自らの認識を進展させ、しっかりと生きようとする少女の姿には心を打たれるものがある。ただし、現実の社会で、こうした経験主義的な認識（実際に被害にあつてから気づくということ）に依拠しているだけでは、取り返しのつかない事態を招くことになる。事実をしっかりと踏まえ、被害を未然に防ぐための理性的認識を磨いていかなければならない。残念ながら、福島原発事故後の日本では、甚大なる被害に見舞われながらも、原発再稼働やむなしとのかけ声の下で、多くの国民が思考停止状態に陥り、真実を見ようとしないうちに状況が広がっているのではないだろうか。

人間の認識は、感性的認識から悟性的認識（事実認識）を経て、理性的認識へと発展すると私は理解している。物事の在り様を考える際、人は事実を知ることが基礎として、あるべき方向性を考えることとなるが、この場合の事実への接近はどのような行われるかと言え、その人が心で感じ、知りたいと感じる力に依拠するものとなっている。例えば、「なぜこんなことが起きたのか」といった驚きや怒りの感性的認識の度合いが事実を知ろうとする動力となる。あるいは「これはとても面白い」といった感性的認識



ももつと知りたいという欲求を高めてくれる。今、我々は、こうした認識の発展の道筋をしっかりと把握した上で、社会認識を高めていかなければならないのではないだろうか。その出発点とも言える感じる力をしっかりと培っていかなければならないと感じている。

本稿の冒頭で、私は卒業生と読書会を行つていてを紹介した。最近では忙しいため、二、三ヶ月に一度の開催となっている。一方、ゼミの学生とは二週間に一度、その間に各自が読んだ本を紹介しあう図書交流を行っている。こうした活動は、もう十数年前から行っているが、実感として言えることは、単に本を読む

習慣が身につくというだけでなく、確実に各人の社会認識の発展に結びついているということである。本を読んで感じたことを他者に話したり、文字にしたりすることで自らの感性的認識が明確化する。次いで、他者との感じ方の違いなどを知ったり、議論をしたりすることを通じて、次の悟性的認識の段階の必要性を強く感じるようになる。さらに読書を進め、豊富な事実認識をふまえて考えること（既知の理論的説明と現実のズレ・矛盾を知ること）で、理性的認識へと到達することになる。

現在、社会には解決を求められる課題が山積している。社会的コンセンサスが得られず、解決の道筋が見えないものも少なくない。ただし、実際には一人ひとりが十分に考えた上で（理性的認識に基づいて）判断を下しているとは思えないものも多い。あまりにも多くの問題が生じているため、思考停止状態に陥るものやむを得ないとも感じるが、それでは冒頭の小説の祖父の認識と変わらない。難しいことではなく、我々は読書等を通じて感じる力を培い、事実を知り、適切な判断力を身につけていく必要がある。社会認識の発展こそ、今の日本に求められている。

巻頭言

社会認識の発展と読書の有用性

野崎 哲哉 (のぎきてつや)

人文学部教授・金融論人文社会科学部専攻主任

TRIO

Vol.14

三重の文化・社会・自然

三重大学大学院人文社会科学部 地域交流誌 [トリオ]

CONTENTS

1 巻頭言 / 野崎 哲哉

2 特集1

鼎談 武村 泰男×遠山 淳×麻野 雅子 進行役 森脇 由美子  
三重に育った人文学 —人文学のおもしろさ—

14 資料を残し受け継ぐこと / 田中 亜紀子

16 「専門」の限界と魅力 / 堀内 義隆

18 三重大学と地域活性 / 田山 雅敏

20 特集2

三重の文化と社会

鳥羽市・三重県の研究 森 久綱 綾野 誠紀

21 鳥羽における石信仰  
—盃状穴を中心として— / 今井 薫

23 真珠産業の発展と近代鳥羽の観光地化 / 小川 真依

25 鳥羽藩領における鯷漁の特質と変容 / 杉山 亜有美

27 寝屋子と島の生活  
—寝屋子を中心に編み上げる人間関係— / 林 拓斗

29 答志島の防災体制における消防団と島の組織の相補性 / 國分 亮太

31 鳥羽市におけるエコツーリズムと地域経済 / 長谷川 栄里

新刊自著を語る

33 四日市公害の過去・現在・未来を問う「四日市学」の挑戦 / 朴 惠淑

34 『或る女』とアメリカ体験 / 尾西 康充

35 環境法講義 / 岩崎 恭彦

36 三重の歴史と風景

四日市公害訴訟判決40周年の節目に / 朴 惠淑

教員エッセイ

38 試行錯誤は続く〜教育者としてのスタート〜 / 和田 康紀

40 変わりつつある大学図書館の役割 / 三根 慎二

42 人との出会い・言葉との出会い / 小畑 美貴

大学院・学部の広報

44 人文学部が地域に果たす役割 / 吉丸 雄哉

46 三重大学人文学部・第8回「公開ゼミ」報告

市民講座「忍者・忍術学講座：忍者とは何か」報告

47 人文学部の研究・教育拠点「伊賀連携フィールド」

48 大学院のご案内

49 雑感 住んで楽しい町/街 / 小田 敦子

編集後記

■表紙写真：鳥羽春祭り(大山祇神社)



特集1

# 三重に育った人文学 人文学のおもしろさ

## 鼎談

遠山 敦  
三重大学人文学部教授  
倫理学・日本倫理思想史

武村 泰男  
三重大学元学長  
三重大学名誉教授  
哲学

麻野 雅子  
三重大学人文学部教授  
政治思想史

進行役  
森脇由美子  
三重大学人文学部教授  
アメリカ史



森脇教授

麻野教授

武村名誉教授

遠山教授

三重大学三翠会館にて

### 三重大学人文学部三十周年を前にして

**森脇** 三重大学人文学部は、法律経済と人文学を看板とした学部として、三重の地に誕生してから来年で三十周年になります。そこで今日は、人文学部の創設にご尽力された武村先生をお迎えして、人文学部からお二人の先生、それぞれ倫理学と政治思想が専門の遠山先生と麻野先生にご出席いただき、人文学部の役割やさらに広く人文学の意義や可能性について、お話しただこうと考えております。武村先生は長年、三重大学教育学部の教授として教鞭をとられ、92年から98年までは三重大学の学長を務められました。その後も鈴鹿国際大学学長など三重県の大学教育に深く携われ、また、三重県男女共同参画審議会会長として、県などの行政にも関わってこられました。武村先生、当時はどのようなお考えで人文学部の立ち上げに携われたのでしょうか。また、いきさつなどお教え下さい。

**武村** 全て記憶ですからね。どれだけ正確に覚えているかわかりませんが、県の要望が元々ありました。法律と経済、法経学部というのが県の要望でした。それまで県庁の職員などかなり重要なところにおられたのが、大体農学部出身の方だったのですね。もともと高等農林の歴史がありますから。教育学部の方は先生ですよね。すると県の行政としては法経

ないかということになったのです。ただし、あの時期は、文部省は国立大学にもはや新しい学部は作らないと決めたところでした。だから、その時学長だった井澤道先生（三重大学元学長、80〜86年在任）などはたいへん苦勞なされたのではないかと思います。学内と県の要望があつて、県の代議士で中央に力のある人もいたりして、文部省は作らないと決めたけれども、たまたま同時に水産学部と農学部と一緒にするという話もあつて実現にこぎつけたのです（スクラップ&ビルド）。とにかく数年間の大変な努力の結果できあがつたというのが、ごく大雑把なききさつです。

学部を出た学生が欲しい。それがそもそもの出発点だったのです。具体化してきたのが1982年ですからその数年前からです。

そのときに主体となるのは、教養部というか―教養関係担当の方々を含む教育学部ということですね。三重大学はみなさん活躍しておられるけれども、大体、応用系の学部です。医学部が応用系と言ったら怒られるかもしれませんが、具体的な人間の生活に直接に関わるもので、農学部もそうですよ。教育学部も教育ですしね。あとは水産があつて、工学部も後からできました。工学部も応用学部と言ってもいいですね。ご承知かもしれませんが、大学に工学部ができたというのは日本が初めてです。明治の時期です。世界的には大学と工学部とは別、技術はまた別だという時代だったのです。こうして見ると、三重大学はどうしたって応用学部ばかりだから、基礎的部分がどうしても欲しいというのが前からあったのです。法経は応用と言っていないかわかりませんが、やはり直接人間の生活と関わるものだから、いわゆる基礎というとは少し違いますよね。やっぱり基礎系もなくちゃいけないのではないかというのが、学内の声としてありました。それで、県からの要望があったので、それを一緒にして文系全体の基礎も含んだ大きな学部を作ろうじや

いては伊藤達雄さん（初代人文学部長、83〜84、87〜88年度在任）がされました。それから文部省指です。こちらは主として井澤学長（当時）と伊藤さんでしたがね。私もたまに一緒にしましたが、私的なことをちょっと言うと、みんなも僕も人文へいく人間だと思つていた訳ですよ。だけどどちらようど学部長になったものですから移れなくなりました。それはともかく、文部省はその時から、今でもそうだろうけど、文学部とか理学的なものには認めないという立場でしたね。三重大の人間としては、他にも理学部が欲しかったのですが、それは認められませんでした。

**遠山** 大学というと、ヨーロッパなんかだとそっちがメインですね。理学部と哲学があるのが大学だという考え方は。  
**武村** そうですよ。だけど、段々そうでなくなってきたのでしょうか。アメリカなんかでは新しい学部とか学問とか熱心に言われていた時期だから、そういう流れもあつたのではないのでしょうか。今でもアメリカでは日本じゃ考えられない学部や学問がありますよ。僕がアメリカへ行つたときに会つた日本人が、大学へ来ていられるというので、何をしていますのですかと聞いたら、ハウスウ関係だつていわれたんです。当然、法律かと思つたら、包む包装、包装学の大学院へ行つていって。びっくりしました。あらゆる



武村 康男

「人文学部も新しい名前と形を作ったからには、文学部ではない何か、それを期待しています。」

(たけむら)

部分が学問になりつつあった時期でした。だから、文部省も基礎的なあまり直接生活の役にたかないものは認めないという方向にあったのだと思います。その間をぬって作ったから、人文学の方もなんとなく新しい形にしないと認められない、という時期ではありましたが、地域という方向を決めてつくったことです。ただ、地域学は地域学でいいけれども、例えば僕なんかの哲学からいうと、地域で違うというのをおかしくて、地域を超えたものでなくてはいけない。でも、なかなかそうもいきません。そういうわけで、人文学部というのは、形の上ではそのように時代に合わせて作ったけれど、作った以上はそこに新しい理念を見つけたというのがある、できた頃の我々の希望でした。でも、例えば男女共同参画でも、それまでの男女平等というのに対して新しい言葉を作ったわけですが、新しい革袋を作ったからには中身も新しくなきゃ、ということもあるでしょ。人文学部も新しい名前と形を作ったからには、文学部ではない何か、それをずっと期待しているというところでしょう。

**遠山** それで文化学科は地域研究の学科

です。でも、人文学では、ちょっと違いますね、教育学部とは。

「地域への愛着と普遍的な正義の関心。これらを両立していけるセンスを育てていきたいです。」

(あさの)

麻野 雅子



**麻野** そういう意味では、法律経済学科でも、地元公務員志望の学生や地元企業で働きたい学生は多いです。ただ、地元しか見えないというわけではないです。最近、私たちの政治思想の分野ではサント教授の白熱教室が流行っておりまして、授業のテキストに使用したりするのですが、その中で共同体主義者のサンデル教授自身は、共同体への愛を語りますが、学生はむしろカントとかロールズのリベラルな正義論に関心を示します。地元で働き地元を愛して自分はここで生きていきたいと思ってるけれども、正義を考えると、やはり普遍的な立場で、という感覚が学生には強くて、とても頼もしいと思ったりしますね。

**武村** それこそさっきの僕の感じからするといい方向ですね。どれだけ大学で学んでもやっぱりこの地がいつだっていいのは、ちょっと感心しなかな。

**麻野** そうですか。確かに、もう最初からここでいいって決めていて、ご家族とも仲が良く、家から出ていくつもりなんて全くないという学生もいます。

になったわけですか。しかし、今日はたまたま先生もご専門が哲学でカントを研究されているわけですが、さつきもおっしゃったように、地域で分けてやるというの、哲学の立場からすると少し違和感がありますよね。

**武村** あるでしょ。  
**遠山** 正直、あります。それをどういふふうに考えていくかということが問題になるのだと思います。麻野先生の場合も、政治思想がご専門だとやはり地域にはあまりこだわらないのですよね。

「地域性」と学生の視野

**森脇** 人文学部の入学者と卒業生の地域を見ると、圧倒的に三重県と愛知県で、まさに地域性があります。

**武村** 東海三県ですよ。

**森脇** 入学者だと4分3以上、卒業生も6割か7割が三重県と愛知県、中京圏に就職します。法律経済学科も文化学科も大体同じです。

**武村** 最初のころは、もうちょっと散らばっていたと思うけど、それは新しい学部で期待もあつたでしょうからね。

**武村** そういう子はどっちかっつていうと、いい子で真面目な子が多いですね。ただね、前々から思っていたのは、昔の水産学部の学生なんかだと、恐ろしく出来がいい学生がいて、恐ろしく変わっている学生もいる。三重大学の教育学部の学生はみんないい子で真面目な学生です。

だから、そういう学部もあつていいのだらうけれども、やはり欲を言えば、視野が広い、全世界なりせめて全日本くらい、視野に入れてという方がいい気がしますね。だから、そういう学生が増えてきたら、それは成功じゃないですか。

**麻野** 学部としては、国際交流に非常に力をいれてやっていますけれど、学生は、どうなのでしょうね。東京に行きたい、よその国に行きたいというよりは、三重がいい。そういうふうにいるのかもしれません。

**武村** 例えば僕はね、三重大学を終えてしばらくしてから、鈴鹿国際大学に行つたでしょ。あそこで、新しく観光学科つていうのを立ち上げていたわけですよ。観光学、すでに他の大学にもあつて、東洋大学なんかは古いですけどね。これもさっきの包装学じゃないけれども、最初、観光学と聞いてあれと思ったのですが、いろいろ聞いてあれと勉強したりしてみると、それはそれなりに意義がある。ただ観光学というのは、ひとつは異世界についての認識というのが基本的にあるで

**森脇** 今はこの地域、三重県・愛知県の学生を迎え入れているのですが、そういう学生に対して、普遍的なものをどのよう

に教えていけばいいのでしょうか。  
**武村** でも、学生の関心といっても、例えば法経でいうと三重県の法経、岐阜の法経があるわけじゃない。学問内容としては、地域性がそうはないわけですよ。そのずれが問題になるのでしょうかね。僕なんかどっちかっつていうと、三重県の間だから三重県に帰れとはむしろ言いたくないほうで、どこへでも散らばれ、というふうに言いたい立場ではありますね。だから、あおりたてるのもいけないかもしれないですが、入学したときは限定されていても、やはり全国とか世界への目をどんどん広げると言ったほうがいい気がします。親には怒られるかな。

**遠山** 文化学科の方はやはり女性の学生が圧倒的に多いですから、地元で生活していくことになるのでしょうか。ですから、ここで生まれてここで生きていくんだという人たちが世界諸地域の文化を学ぶ意味は何か、ということが問われることになる。結局は人文学そのものの価値というか意義というものになってくるとは思いますが。

**武村** 難しいですね。例えば教育学部ですと、もともと人間とか地域に結びついていて、三重県の地が好きだから三重の子供に教育に関わるという意識があるわけ

しょ。それを進めるという点ではすごく有意義なのですが、僕が考えるには観光というものが成り立つということとは、要するに帰る道がすでにあるということを前提にしている。観光学というのは、自分の帰る道が本拠としてあつて、それで目を時々外へ向けて戻ってくる。それはそれで意義がありますが、生活の根拠まで動かすものではないですよ。だから、今言われたように、国際的な関心はあるけれども結局は地域をとるといふのは、要するに観光のレベルにすぎない、そこが問題かもしれないですね。それだけに限定されるのではなくて、その結果をもって外へ出ていくという人だつて出てこないといけないのかもしれません。

**遠山** でも逆に、帰る家が当然のようにあるという、その当然をもう一回問うてみることに意味があるのではないかと。思います。文化学科の地域研究は、日本の研究だけじゃなくて、ヨーロッパやアメリカ、アジア・オセアニアといった諸地域の文化を対象としています。だから学問の内容が三重県に直接結びついてい



遠山 敦

## 「自分が今、生きているっていうことの意味を突き詰める、人文学って最終的にはそういうこと」

(とおやま)

いうことだと思おうので。人文学は、知識というよりも知恵というものでしょうか、そういうものに関わるものですか、それをどういうふうか、学生に伝えていくのにかに難しさを感じます。学生は違っていることに関心

が向かい、例えばある地域に過疎問題があるとかいった相違点に目がいくのですが、でもそれを考えることを通じてこっちへ帰ってこないという意味がないように思うのです。だから私自身は、必ずしも外へ行くことだけがいいとは思わないのです。確かにそういう元気のある学生がいた方が楽しいことは楽しいのですが。ただ、異文化を通じて自分にとっての当たり前を問いかけるということの意味があると考えています。

**武村** 問いかけですよ。サンデルさんの講義も、問いかけとかそれに対する評釈は非常にうまいですね。でも、サンデルさん自身は何を言いたいか、言わないですね。

**麻野** テキストでは、サンデルさん自身の主張が展開されていますけれど、ただ、それを讀んだ学生はあまり共感しません。彼ら・彼女らは、日々みんなの価値観が違うことは実感しているのです。そ

こを超えて共同体で同じ価値観を共有すべきと言われても、戸惑ってしまうようです。

**武村** しかし、ああいう問いかけをしよつちゅう積み重ねていくと、遠山さんが言われたように、自分の足元を見るようになるのでしょうか。

**麻野** そうですね、意外なところでなりますね。例えば、ロールズの正義論のなかに、自分の立場や属性を分からなくする「無知のヴェール」をかぶって正義の問題を考えると、話があります。最初はみんなたいへん驚いて、そんなことできるわけがないし、自分なら絶対に自分の利益しか考えないと言ったりしますけれど、しばらく読んでいくとその良さに気付いていくんですね。客観性っていうか、自分と違う立場に置き換えて考えていかななくてはいけないというふうな。結局みんなそこが好きになっていく。彼ら・彼女らが地元に戻っても、その地元愛が地元のエゴになることもあるというところまではまだ見えていないかもしれません。おおいおいそういう感覚が育つていくって、おおいおいいいなと思ったりしています。

**武村** 地元からの要望としては、県なんかよくいうのは、三重大学が例えばこれだけの学部を作って、結局三重県のためになったかという視点ですと見るわけですね。それがまたかなり短絡した感じ

にはなんと言いましたか。

**麻野** 法律経済学科です。

**武村** 法律経済学科、法経学科というわけですね。人文学部が三重大学の中で引つ張っていく学部になるには、どこがどうすればいいか。要するに、県もそうだけでも、大体、実生活が頭にありまから、あまり抽象的な思考とか広い思考というものを受け入れない傾向があります。三重県だけじゃないでしょうけど。たとえば男女共同参画も理屈としてはかなり浸透している。名前はね。でも実生活では動いていないということがある。だから、人文学が目指す思考は、まず概念として浸透しても、実質的に自分のものとなっていないのは難しい。

**遠山** 以前武村先生と研究会を一緒にした折に、先生が、そもそも生きているのがいいことなのかどうか分からないじゃないか、そこから考えるのが哲学だっておっしゃったことが強く印象に残っています。具体的には例えば、自分の命を犠牲にして他人を救うといった問題、それは学生には面白い問題らしくて色々言ってくるんですけど、だけど人権も含めて、そもそも生きているのはいいことなんでしょうか、と考えてみる。そういうところに人文学っていうのは光を当てて考えていく。それが役に立つかっていえば役に立たないかもしれませんが、でもそれを考えない限り、言ってみれば、さつ



■ 三重大学人文学部校舎全景

くなってきたかと思えます。設立当初からすると、やや実務志向、実用志向になっていると表現できるのかもしれない。

**武村** 実務志向っていうても、どうでしょう、実務という言い方は問題もありますね。例えば、ギリシャの時代を考えると、そもそもギリシャの思想の始まりっていうのは、ピュシス、自然ですね、それとノモスという人間のものが、一緒になっているわけですよ。原理的に分かれています。それはソクラテスクらいからです。日本だって例えば、君主が悪いことをすると天変地異が起こると

や、例えばそれをひとつの制度として構築していくときには、一緒にできることがあります。例えば、アラート・システム(注1)の話なんかもそう。連携しながらやっていける部分っていうのは当然あると思います。

**麻野** 社会科学科でスタートしたときには、学際性をみんな大事に思っていて、経済、経営、法律、政治が交流している教育研究を模索していたのですけれど、今の傾向としては、専門化に傾いていると思います。各分野の基礎をきっちり学生に教育していくことを重視するようになりまして。もちろんそういう中で、地元企業や地元自治体とのつながりは深

で、短いスパンで役に立ったかといった感じで見るところがあります。それに加えて、僕らの時代ぐらいまでは、三重大学の方でも国立大学だという変なおこりがあって、地域のためにあるんじゃない、なんていうのが一方にありました。だから、結構複雑に絡み合っていましたね。今は国立大学だ、という意識はどうですか。

**遠山** 基本的には回りの学生もそうですし、非常に地元に着しているというのには意識せざるを得ないですね。国の中に位置けてどうという感覚はあまりないようですよ。

**麻野** だんだん県を意識する機会が多くなってきたりもありません。

**武村** 人文学部を作った時は、なかなか難しい時代でしたね。でも、よくできたと思います。ただ、外から見ると、作った時の経緯もあるけれども、文化学科と法律経済学科がどういうふうなうまうまになっているのかということも気になりますね。

**遠山** 難しい点もありますね。

### 法律経済と人文学

**武村** やはり異質だと言ってしまう、そうなのでしょうけれども。

**遠山** 部分的に融合しているところは、沢山ありますよ。地元の社会問題を様々な立場からみていくといったとき

きおっしゃっていたような例えば人権といった言葉も、言葉としては踊っているけれども、ちっとも身の入った問題として考えられてはいかないかと思うのです。

**武村** 本当にそうですよ。僕自身が哲学のことしか知りませんが、例えば三重県でやってきたことを自分で考えると、人文学の役割もそうでしょうが、男女共同参画にこだわって言えば、東京の人が言ったからとか、偉い学者が言ったからとかではなくて、自分たちが思考してきたことをそのまま皆さんにぶつけて、自分たちで考えようってところから出発しました。その時に出した課題が、男女平等と男女共同参画、人権の問題と男女の差別の問題は、同じなかわ違うのかということ、そこが出発点です。たいていの人は、運動家の人でも中央の有名な人でも、みんな一緒にしていますね。それ以上は考えない。女性の人権を守るのと男女共同参画というのは、同じことだと思っているわけです。男女の差別反対と男女共同参画は同じだと思っている。あるいはそれは人権擁護と同じだと思っている。これをずいぶんつきつめて十何年かやってきて多少は進んだかなと思いますね。なかなか広まりません。

注1…医療、福祉など地域の生活問題に関し共通理解を形成するためのシステム

どね。そういう迫り方っていうのは、人文  
学の立場だといくらでもできるはずだと  
思っています。人文学というのはそうい  
うことなのか、という気はしますね。  
**麻野** 生きていくということと学問とが  
深く絡み合っていくこと、自分の生の中  
で考えていくことが大事だと思います。  
大学の4年間は、学生が大人になりはじ  
める時期です。ここで種をまいておけば、  
そのあと生きていくなかで、例えば結婚  
してはじめて男女共同参画の問題が心に  
しみるといったような、実践のなかで知  
が育ってくることもあると思うのです。  
人文学がもつ人の生き方を支えていくと  
いう意義を、大きな声で唱えていかない  
といけないとも考えます。

「対話」を通して学ぶ

**森脇** 武村先生はカントがご専門ですけ  
れど、たとえば、今の学生からみると時  
代もずいぶん違うカントのような哲学者  
の思想を、具体的にはどのように伝えら  
れましたか。

**武村** 僕はあまり教育者的な方じゃない  
と思っっているので、あまり偉そうなこ  
とは言えないのですがね。要するに教育  
者的であるっていうのは、極端なこと  
を言えばどうにもならない子供でも一生  
懸命温かく接していかなくやいけないで  
しょ。僕はどっちかっていうと、向こう  
が意思がある人でないと熱心にならない

**遠山** 対話という意味でいえば、別に生  
きている人間とだけ対話するわけではな  
くて、古典を読めというのは、そうい  
うことですよ。例えば理系の学部へ  
いって驚くことは本がないことです。そ  
こでは、要するに古いものには意味がな  
い。雑誌はどんどん新しいものが発刊さ  
れます。一方、我々は相変わらず紀元前  
のところからやっている。彼らにとつ  
て知識っていうのはほとんど新しく積み  
上がっていくものなのでしょうが、われ  
われのはそれとは違っている。さつきか  
ら出てきている言葉でいえば、哲学とか  
思想とかは普遍的な学問というけれど  
も、それは普遍的な知識か、誰でも便利  
に使える知識なのかというと、どうなの  
か。例えば偉大な思想家の思想は真の意  
味では継承されない、その人が死んじや  
うと終わってしまう。非常に深い個性は  
継承し難いように思います。でも普遍的  
な問題にはしっかりとつながっている。  
そういう人と対話することが、本を読む  
ことだと思うのです。

**武村** そうですよ。僕なんてこうやっ  
てしゃべっていますけど、本当は非社交  
的なんです。だから、まさに本と対話し  
ているしかなかった人間です。でも、本つ  
ているのは、どうしても自分の好みの本  
を選んでしまいますね。

**麻野** 確かに、本は自分の支えですよ。友  
達を作って仲良くするのは学生にとつ

タイプなんだ。だから、あまり教育者的  
じゃないと常に反省しています。だって、  
学生のエネルギーの流れを無視して、現  
に持っている価値観を壊してばかりする  
というのは、ある意味危険ですよ。僕は  
ね、教育っていうのはまず第一には価値  
観を壊すこと、第二に価値観を作ること  
だと思っっていますよ。壊すだけだとだめ  
でしょ。だからね、難しいですけど、例  
えば、教育学部の学生はいい子で真面目  
なのですが、いい子で真面目ってことは  
かなり固まっているのですよね、価値観  
が。僕なんかよく「人を殺してはなぜ悪  
いか」って発問したものです。最近はみ  
んなが言うようになってきたからあまり  
言わなくなりましたが。そうすると、す  
ぐに難しくなってしまう、学生は答えら  
れないでしょ。だから、サンデルさんを  
見てうらやましいのは、先生よりむしろ  
学生。向こうの学生っていうのは、つま  
らないことでも発言できますね。恥ずか  
しからずね。

**森脇** そうですね、しゃべって対話で成  
り立っている文化みたいなところがあり  
ますから。日本人はその辺ちよつと苦手  
かもしれません。日本人は真面目なか  
もしれないですね。

**武村** 向こうは、しゃべって自己主張し  
なきゃだめっていうのがあるのでしょ  
ね。アメリカだけじゃなくて、ドイツも  
そうでしたよ。授業は大体4分の3くら

て非常に大事なことですけれど、そうし  
た人間関係の中で行き詰ったり、自分が  
認められなかったり、他の人と違うこと  
を感じたりしたときに、やはり拠り所に  
なる世界が必要だと思えます。その時に  
本と出会って、本に応援してもらい、自  
分の好きな本の世界に浸って、元気づけ  
てもらったらいんじゃないかと思いま  
すね。

**武村** 僕なんか偶然でこうやって生き  
ていますけど、本当に僕、非社交的だ  
ね、人前でしゃべるのは嫌だし、学生  
の時に大学のゼミでも発言するのが嫌い  
ですつとやってきました。三重大に赴任  
して、たまたま学生担当の委員に当たっ  
て、そうすると、学生と実際に接して、  
教授会ごとに学生の動向を報告するわけ



いで終わってあとは質問ですよ。みんな、  
どんな質問するのですよ。つまらない  
ことも言うんですね。僕らなんかの感覚  
だと、そんなことも知らないのかって言  
われそうだから、質問しない。つい黙っ  
ていますね。

**遠山** プラトンだって対話篇ですか  
らね。

**武村** デイアロゴスでないとだめなんで  
すけどね。

**遠山** なかなかそれを引き出すのは難し  
いですね。

**武村** そういう点は、サンデルさんなん  
かいいますね。

**麻野** そうですね、彼は、具体例を使っ  
て意見を引き出すのは本当にうまいで  
す。私自身は、ゼミなどで、学生にこ

です。その報告がなんとなくうまくいっ  
たんでしょね、それから、いろいろな  
役が当たるようになってしまつて、だか  
ら偶然ですね。それで学長になると、県  
の人と話さなきゃいけないじゃないです  
か。全く異質の世界の人と話をするわけ  
です。そうすると、今まで食わず嫌いみ  
たいに否定していたものも、なんとなく  
意義を見出すようになったりするのです  
ね。自分じゃ本当は得意じゃないのです  
けどね。

学問の探求 VS 即戦力の育成

**森脇** 大学における人文学の意義とい  
うのはどこにあるでしょうか。総合大学  
中で人文学部の生きる道といったらよい  
のでしょうか、それはどこにあるとお考  
えでしょうか。

**武村** というか、他大学から見てもど  
うですか、うちの人文学部は。どうい  
うふうに見られていますか。

**麻野** 私の高校の時の同級生が三重大学  
人文学部を受けて、不合格になつちゃっ  
たんです。滋賀県の高校だったのですが、  
人文学部っていう響きも新鮮だったし、  
広いものを勉強できるのではないかと、新  
しいことをやるのではないかと、それに  
世界や地域にも出ていけるという話で、  
友達もすぐ行きたがっていました。た  
だ、創設一年目で、ハードルが高かつた  
んです。その十年後くらいに私はこちら

こは何を言っても安全な場だというメッ  
セージを出すようにしていますが、しば  
らくこなれていかないと、なかなかみん  
な本音を言わないですね。

**遠山** なにか質問を書かせる、書いて  
はくるんですけどね。

**全員** ああ、そうかもしれませんね。

**遠山** ちゃんと考えているのだから、言  
えばいいじゃないかって言うのですけ  
ど、なかなか授業中には言わない。それ  
で私も麻野先生のようなメッセージを積  
極的に発信するようにはしているん  
が…。訓練の場としてはいいえ、できれば  
対話をしたい。でも我々の学問の領域の  
問題もあるかもしれないけれども、難し  
いこと言わなきゃいけないのではないか  
と思われてしまう。

**武村** それはあります。だから学生と  
しゃべるのもそうだけど、教員としゃべ  
るのも大切ですね。僕の親父は弁護士と  
か検事をやったから、法律をやれって  
いわれたけれども、僕は法律嫌いだつ  
たから全然やらなくて、毛嫌いしてい  
たところがありません。ところが、その後  
振り返って法律を考えると、また違つて  
くるのですよ。父ともうんと話し合つて  
いればまた違つたろうなと後からは思  
います。ただ親子で十分話し合うとい  
うのはあまりないですからね。だから、い  
ろいろ語りあうというのは基本かな。先  
生同士でもね。

に赴任させていただいたのですが、人文  
学部だと聞いてとても嬉しかった。出身  
が旧帝大の法学部で権威主義的な雰囲気  
がありました。それに比べると、ここ  
らに来たら、雰囲気は穏やかで、学生と  
教員の距離が近い。先生と何人かの学生  
が食事を楽しんでいる風景などにさえ驚  
いた記憶があります。今までは違つて  
肩の力を抜いて学問をやるのではとわ  
くわくしました。その後、国際や環境な  
どの言葉が入った、複合的な学部がたく  
さん作られました。

**武村** 複合的学部といえば、昔は文理学  
部っていうのがあちこちありましたね。  
文理学部というと、完全に文と理だから  
もう文部省は認めなくなりました。だか  
ら人文学部という名前がついたのは、初  
めてではなかったでしょうか。

**遠山** 学部としてはそういうことなので  
しょうが、相変わらず共通教育、いわ  
ゆる一般教養の方は昔のままの枠組みで  
す。それこそ相変わらず、人文、社会、  
自然で何単位とれということになってい  
ます。例えば、工学部とか生物資源学部  
とかそういう学部にも、共通教育を提供  
していくのは、主に人文学部が担ってい  
るわけです。それに、文科省はオウムの  
事件があったりすると、哲学は大事だと  
か、かなりご都合主義的に言ってくるわ  
けですが、そういったことを期待される  
ことについては、どうでしょうか。

**武村** よく政治家なんか哲学っていうでしょ、最近ね。我々が考える哲学とまるで意味内容が違いますからね。要するに、彼らの言う哲学とは、すでに何かある信念があつて、それに基づいて行うこと、ご都合主義ではなくて信念に基づいてやっていることを指すようですね。我々は、何も分からないのが哲学だと思つていられるのですけれどね。

**麻野** 探求していくことですね、確かに。**武村** 実際には直接役に立たないんだめなんでしょうね。難しいところですよ。

**森脇** 短期的な役に立つ、立たないということ、ずっと長い期間、例えば人生とかにおいて役に立つかどうかという問題もあると思いますが。

**武村** 日本というのは、かなり現実的な民族ですからね。明治の人は、その出だしは多分あまり純粹じゃなかったと思ひますけれど、西洋の文物に接すると、日本に比べて色んなところでとても進んでいることがわかる。文明的な意味でね。多分そこには直接役に立たないような研究とか哲学とかがあつて、そうなつたんだなと理解した。ですから、あまり純粹ではないと思いますが、それでも明治の人には学問というのは直接的な利益よりもっと根本的なものを目指すものだという意識がまだあつたと思うのです。現在はその意識がなくなつてしまいましたから、なおさら根本的なものを指すのではない。地域性というのも、それは特別であるかどうかは、もっと他を知らないという結局わからないことだと思つたのです。

**武村** 本当はね、三重県の職員だつて世界へ目を向ける人がいないとしようがないはずなんです。

**麻野** 確かにそうですね。むしろ、大学時代こそ、外を見る、知らない文化を知るチャンスではありませんよ。

内への問いかけ

**遠山** 今、先生のお話の中で世界に目を向け外へ出て行った方がいいといわれましたが、私はあえて言う、そういうことは第二義的なことじゃないかという考え方です。例えば、新聞の調査などをみると、経済的な豊かさより心の豊かさをといった結果が出ます。でもそれは結局何だろう、心の豊かさといえばなんとなく漠然と分かつたような気になつて、よくお金じゃないよ、みたいなことはいいますが、豊かであるということはどういうことなんですか。私の場合は、もつと内向きに問いかけていくことが大事だと考えます。

**麻野** ああ、そうですね。自分の中へと問いかけを深めていくつていうことですね。

**武村** 知事さんと話した時のことです。内容はあまり知事さんと関係ないのですが、例えば、幸福は金じゃなくて心

難しい。だから、小泉元首相の百俵の話も、やっぱり百年くらい経つて効果をみるつていう意識はあんまりないでしょうね。

**麻野** 学生にも企業などから即戦力というふうな期待がされるので、自分の考えを表現することを急がれているという感じもします。むしろ、本当に自分の考えが正しいのか、どんだん疑つていくところが、大学生の醍醐味だと思うのですけれど、早く作つて、ちゃんと用意して、人の前で示しなさいというのはちょっと酷かな、という気もします。社会全体がすいぶん余裕がなくなつているのかもしれないね。

**武村** 即戦力を重視するという考えは、例えばアメリカの影響といわれています



だつていう、それ自体は非常に正しいわけですが、ある意味では正しいのですが、それを社員を酷使している会社の社長が言つたとしたら、おかしいでしょ。それと似たようなことを知事さんに言つたことありました。言う人の立場によつて、言葉に力を持つ場合と持たない場合があるので、難しいですよ。それから、今でもそうか分かりませんが、以前、三重県では、例えば教育委員会の課長やなんかに文部省から出向してきて、決まつた席がありました。指導課長はたいいてい文部省の若い人がしたりする。そうするとね、三重県に赴任してきて、半月、ひと月経つと、すでにかなり勉強して、三重県人より三重県のことを知つていたりします。そうすると、反発もあるけれども、感心する職員もすいぶん出てきて、中央のことを知つていながら三重県を知つていくということ、やっぱり、意見をきいてくるようになるんですね。だから、本当に役に立つというのは、三重県のことを知つていられるのは、三重県のことを知つていられるのでしょ

うか。例えば、歴史学をやる場合に三重県の歴史だけを専門とする先生が特に必要なのか、そうでなくて、歴史学の方法論を充分身に付けていれば、別に三重県にこだわらなくてもいいのか。そのところが、やはりあるかもしれません。行

よね。だけど、アメリカなんかでも、例えば医学教育は基本的には医学でもなんでもない大学を卒業した人が行くでしょ。非常に長期的ですよ。そういう意味では即戦力じゃないわけだ。逆に言えば、日本の方が即戦力だけという感じがします。例えば終身雇用制つていうのが段々と否定される形になつて、引き抜きやなんか当たり前になつてくると、即戦力が欲しいですよ。だけど、学生にそれを念頭に入れるつていうのは、少なくとも教育としてはおかしいかなつて感じはありますね。

**麻野** 三重大学文学部の一番の売りは、やはり少人数教育だと思います。ゼミなどで、自分の意見を吐き出させて、他の人と会話させて、自分の小さきな気づかせ、今の自分を越えていこうとする意欲を引き出すのが教育の役割なのかなと思います。

**武村** 即戦力のことですが、一方で本当に心ある企業家というのは、即戦力だけを求めるといふのは違うかもしれないという気もしています。僕なんかまるで無知なのに、たまたま付き合いがあるだけで、百五銀行の監査役をやつたでしょ。川喜田さんはもう亡くなつてしまいましたが、川喜田さんはやはり今みたいな即戦力だけ求めるのはおかしいつて、本人も言つていましたからね。

**麻野** それでは、即戦力というのをあま政の人たちは、三重県の歴史を知つてい

る人がいいと、こういうわけですよ。人文学部の見識としてはどうでしょうか。別にその点はこだわらないのでしょかね、きつと。

**遠山** 専門外ですが、方法論を身につけていれば、三重県でも、愛知県や岐阜県でも対応できることだと思ひます。でも、話を戻して恐縮ですが、さっきの豊かさの話、昔の人がどういふ形で豊かさを感じていたのかを考えると、今の自分の豊かさを考えることになるのだと思ひます。例えば柳田泉男さんの話で言えば、どれだけ先祖の靈魂と親しく交流したかが豊かさとして深く関係している。確かにそういう生活は失われつつあつて、それを回復するのは無理なのかもしれないが、だけど豊かに暮らすこととはなんだろうかと考える手がかりになる。宗教でいえば、浄土や地獄を構想することで、昔の人が生きるというところにどういふ意味を見いだし、何を豊かだと感じていたか、そういうことを自分の目で発掘していく。そういうことをしたいなと私なんかは思つています。それは結局自分のことにつながることもなる。自分のおばあさんが先祖を拝んでいたとするでしょ。それを迷信だと片付けるのではなく、それがどんな風に生きられていたかを考えて欲しいと思つています。

り真に受けなくて、自分なりの厚みを作つていかないといけないということでしょう。

**武村** 三重大学つていうのは、どつちつかずのところがあるんですよ。基本的な学問をきつちりやることだと思ひられている大学、すぐ何かの役に立つだけではないと思ひられている大学、そのどちらに傾くか難しい感じはありますね。

**麻野** やはり地域を支えていく人材を輩出していきたいです。

**武村** そうですね。だけど考えてみれば、例えば工学部や医学部だつて、どこにでも通用する学問です。別に三重県だけにあつていいところは、ある意味じゃ分かり易いですよ。教育内容と三重県に就職するかどうかっていうところは別のレベルで言えるでしょ。人文となると、どうかな。やはり、期待も中身も含めてあるかもしれないですね。

**麻野** 学問・研究という意味でも、地元企業や地方自治体を直接サポートする役割はあると思ひますし、そうした研究に学生を参加させていくなかで地域に貢献する人材に育てていくという側面もあると思ひます。

**森脇** 地域性とは何かというの簡単ではない気がします。私はアメリカ史が専門ですけど、日本がアメリカと違えば、日本が固有かというところといえ

**武村** 学生はどうですか。そういうことに関心をもつ学生はいますか。

**遠山** いっぱいいますね。だけど、彼らにとつては靈魂の問題などはSF的なものどくつっているんですね。何か本を読みなさいと言つて読書会やるのですけど、SFを持つてきたりするんです。さっきの対話という話からいって、自分の好きなものを読んで、他の人は嫌いでも無理やり読ませて悪口でもなんでもいから感想を言わせて、というようなことはやろうと思つていますね。

**麻野** 大学とはそういう交流の場、自分の知らないことに出会う場にしたいですよね。

**武村** 基本的には、学生は、その都度新しい視点を示唆してもらつていふ必要があるということですね。

**麻野** それに、日本の中にも、外国に匹敵するような異文化が、過去という形で存在するということでしょう。

**武村** 例えば、脳死問題考るとね、いろんな主張があつて、日本を異常に意識する人とかね、そうでない人がいるでしょ。だから、日本というものを充分考へると同時に、ヨーロッパのことも考へられる人ではないと、うまくいかないでしょうね。僕なんかどつちかつていふと、脳死は賛成なんですけど、それは絶対に正しいから賛成ということではなくて、そういう立場に立つてみようという意味合いな

だけなのです。僕は、いつも仮説の立場です。僕の中では絶対のものはないのです。仮にこの立場に立つことにしよう、というふうを決める。だから、あまり人を強制するのは好きじゃないですね。ただ、みんながそういう立場でも困るでしょ。政治家には向かない。

**武村** そうなんですよね、だから人文学部も可能性はいっぱいあるじゃないですか。学生に対してもね。ただ学内的に言うとな、工学部は役に立つ、医学部は役に立つ、があるわけです。教育学部も先生を作るとね。人文学部はさて、というよな。そういう視点が当然ありますよね。それに対して強力に、いや、こういう立場こそ必要だという主張する部分、学内的にはいりませんね。

**麻野** それを問いかけるのが人文学部教員の商売というか。これでいいのか、どうあるべきなのかと、教員みんなが問いかけるので、なかなかひとつの哲学にまとまらないところもあるかもしれません。

**武村** 今すぐ人文学部をどうこうという流れはないでしょうけどね、むしろこういう、人文学なり基礎的なものをもっと充実しないと、本当にいい大学にはならないと思っていますから。それをもちよつと、レールに乗せられないかなと

人文学は何の役に立つの

いつも思っています。

**森脇** 大学の役割ということでは、今頃はよく社会連携を大学は求められています。学生指導を超えた地域社会への貢献がどれだけできるか、といったことです。もちろん地域だけじゃなくっていいのです。社会への貢献ということについてはどのように考えられていますか。目に見えやすいものと、これだけ貢献しましたとはすぐに言えないものがあると思うのですけれど。武村先生はさきほどからお話にも出てきたように、行政なども長年関わっていらつしやいますね。

**武村** 僕は哲学が専門ですけど、哲学なんていうのはもともと役に立たないというところで慣れてきていますから。だからよく言うのですけれど、県でいろいろ依頼されましたが、哲学で依頼されたことはひとつもありませんね。例えば、伊藤さん（初代人文学部長）だったら、地理学で使われる。でも、哲学で使われているという事はないですから。

**麻野** 哲学だと根本から考えてしまつて、依頼先としては困るかもしれないですね。

**武村** いろいろものをいう時に、僕の哲学なんて出したことありませんね。だけど、自分の生活と哲学が結び付いているという点では、かなり人よりは結びついているかなと入つてくるようになってい

話もかなり入つてくるようになっていす。これまで、物理や化学の原理や法則を教えるも、どのようにそこに到達したかはあまり伝えてこなかったような気がします。習っている理科の法則の背景に、こんな長い歴史があるんだというのを伝えていけば、理科嫌いも少なくなるのではと思ったりします。

**武村** 例えば数学でいうと子供の成長していく過程が、数学体系の原理から立ち上がってくる流れと一致しているかという、それでもないわけですね。だから、子供の時代にはあまり原理的な、例えば

ば一時期水道方式なんていうのがありますけど、そういうのは理解できないわけですね。ある程度前を全然無視して暗記させるっていう時期もないとだめですよ。そこは難しいですね。僕は、今は歴史が大事だつていうけどね、多分、若い時はそうは思えなかった。そこが教育としては難しいところですよ。

**麻野** そういう原理的なところを捨ててしまつて暗記だけにしたら、子どもは暗記マシンにならばいいのやつていうことになつてしまいますし、そうすると、大学にきて挫折するということも多いと思いますね。

**武村** 社会だつてそうでしょ。



ているかなとは思っています。ものを言う時間も、いつでもそういう立場でものを言っているつもりはあります。それが役に立っているかどうかは、分かりませんが、男女共同参画についても多分そうした迫り方している人は全然ないですよ、全国的にも。どんな問題でも、同じような迫り方ではできるという気はしますね。

**麻野** 社会貢献という意味では、先ほどおつしやたような、都市計画の時にコメントするとかアイデアを出すとか、そういうこともあるのでしょうか。違つた方向もあると思います。たとえば、年をとつてきて人生を振り返りたくなつてくる四十代や五十代で、人生の意味を、社会の成り立ちをもう一度考えてみたい人への貢献などです。プライベートなことですけど、夫は数学を教えているのですが、最近、高校時代に挫折した世界史の本ばかり読んでいます。年をとつて、より広い視野で自分や社会を見直したい、そんな気持ちにもなつてきているようです。社会人の方で大学院に来ていらつしやる方も、そういう思いがあるのではないのでしょうか。

高校時代まで暗記ですからね。哲学・倫理学でさえ暗記ですものね。難しいことですが、多分、そういうのを訂正するのが人文学部かも知れないと思います。

**遠山** 哲学っていうものは、昔なんかだと、お寺の和尚さんみたいな存在だと思つています。困つたときに聞きにいけるついでに、何かの役に一人いれたい、普段は役にも立たないけど、いれたいんだつていうふうなものです。今はそんな時代ではなくなつてしまつて、いつも役に立つてくれつていうところがある。

**麻野** そうですね。何の役に立っているのつて言われます。

**遠山** 和尚さんに聞きに行くのはお金儲けの話であるわけがない。どうしたらいいでしょうかという時に聞きに来る。普段ぼつとつとしているのだけど、そういう意味で役に立つ。そこにいるだけでいいつていう存在。いわゆる「者」のつく易者とか、学者とかはそんな存在だつたと思うのです。

**武村** 初期の東大の先生で、易者からなつた人がいましたね。昔は、面白かつたですね。

**遠山** そういう意味では余裕がないですね。今はもう。

**武村** 北川さんが知事になつた時に大改革したわけですよ。効率つていうものを基本において数値化して。それはそれで三重の行政の在り方を非常に変えて、

**武村** それは、少しはあるのじゃないでしょうかね。僕なんか高校時代、社会科つて一番嫌いで、全然社会科はだめです。時々、試験で点取るときだけ暗記したらいいと思つていました。教育学部に着任して社会科に属していましたが、歴史は嫌い、地理はいや。でも今一番大事なのは歴史だと思つていますからね。変わりますよ。

**麻野** 人生を重ねて、そうしたら、色んな視点から見なくなる。

**武村** 学生もそうだけど、僕は附属中学の校長も少ししました。その時に勉強つて何のためにするのかつて訊かれましたね。僕は、人間が過去どれだけ考えに考えてこまできたのかを知るためだけのことだと言つたの。そういう視点でみると、例えば数学なんかでも、二次関数、二次関数をグラフにするのだけだつて思想の全歴史と関係がある。哲学思想だけじゃ

とても効果があつて評価もしているのですが、数値化とか効率化に合わない部分もあるでしょ。北川さんのいい所はね、本質的なことをわつと掴むところがあつて、男女共同参画も内容を十分理解して、いたかはわかりませんが、それが大事だつていうのだけは掴んでいる。効率だけじゃだめだつていうのを2期目の終わり頃理解されたのですよ。だから、3期目にそれを期待したら、いなくなつちゃつた。だから、そういうのを悟る人は悟りだしていますね。効率的なだけではだめだつね。特にそれを言うべきなのは人文学かも知れませんね。

**遠山** 大学では相変わらず、数値目標にしばられていなければ。

**武村** 三重大全体が応用的な部門がほとんどだから、数値目標を出すのが合うんです。だから、人文だけ反対してもなかなか進まない面がありますね。

**森脇** とはいえ、せめて人文ぐらいは効率のようなこと以外のことを言うべきだとも思いますが。

**武村** だから、人文学部がそういうことを充分に言うためには、人文学部が重要視される位置に必要がありますね。

**森脇** 人文学部や人文学のあり方や将来について、根本的な問いかけをいくつもお聞きすることができました。本日はこの席にご参加いただき、ありがとうございます。



■ 三翠会館(三重高等農林学校同窓会館として昭和11年建造)登録有形文化財(建造物)

# 資料を残し

## 受け継ぐこと

田中 亜紀子

人文学部 准教授  
刑法

数年前から参加させていただいている『愛知県近代1(政治・行政)資料編』の本年度中の刊行に向けて、掲載資料などの校正および典拠確認作業が佳境に入っている。私の担当は「郡の改正」「戸籍の制定と壬申戸籍」「司法体制の整備と治安維持」だが、自身の研究テーマと重なる「司法体制の整備と治安維持」はともかく、残りの二分野については、未だ不勉強な分野であることに加えて、私が大阪出身ということもあって、愛知県の前身である尾張・三河等の諸地域のイメージが十分に把握できておらず、知っていることや理解していることよりも、知らないことや、感覚として未だ十分に理解できていないことの多さに悪戦苦闘している。とはいえ、作業がつかないということはなく、資料の扱いや読み込みなどの諸点において到底叶わない国史研究者や、明治以降の様々な史料をお持ちの郷土史家といった方々に、作業を通じて多くのことを学ばせていただいております、知らないことを知ることが好きな私としては楽しい日々を過ごさせてもらっています。また、県史編さん室の担当者の方々

には、ややもすれば本務校の職務との関係で作業を停滞させてしまったり、自分の関心に沿って行動しがちな研究者の性であるとか、自分の特に関心のあるテーマに掲載希望資料が偏ってしまいがちな執筆者に対する叱咤激励や、必要な資料の入手や確認、私の勉強不足で苦手としている崩し字や異字体の解説などの活字化作業の支援をしていただくなど、周囲の方々から、県史編さん作業という息の長い活動について学ばせていただいている。なお、今回は資料編なので、明治五年から二二年の愛知県に関する政治・行政分野において重要だと考えられる資料を収集し、そこから掲載すべきものを厳選して活字化する作業と、その資料の解説文を書く作業を中心に行っているが、資料編に引き続いて通史編の編さん作業も始まっているため、今後数年間は、何らかの形で愛知県史編さん事業に係らせていただく予定である。

法律経済学科で刑法を担当している者が県史編さん事業に参加していることに違和感を抱く人もいるかもしれないが、展示に関しては明治村があり、その他にも大正から昭和にかけて用いられていた旧名古屋控訴院(現名古屋市政資料館)に保存・復原修理工事を行い、名古屋市の公文書館として利用している。歴史的な建物の保存・修復工事は少なからぬ費用が必要であることから、基準を満たした建物についてはすべて保存すべきだとは言えないが、多くの人にとってわかりやすい資料であるため、今後できるだけ残り残してもらいたい。

が、私の専門は法学部にありながら文学部に近い研究分野の一つである法制史であり、特にその中でも少年法の前身である大正少年法やさらに更に溯って明治三十三年に制定された感化法といった、明治中期から大正期にかけての未成年者処遇法を主たる対象として、明治以降の刑事法や社会福祉法制について研究しており、その意味において私は歴史の研究者である。また、所属していた日本近代法制史研究室の指導教員や、今回愛知県史編纂作業に参加してみないかと声をかけてくれた研究者など、地方史の編纂に参加したことのある法制史研究者は少ないわけではない。ただ、大学における講座制の解体、法学部に関しては司法試験との関係で実定法が中心となりがちな法科大学院設置の影響を受け、基礎法学の分野である法制史においては、研究者の確保ならびに養成が今までの以上に厳しいこともあり、指導教員以下大学院生までが研究室メンバー

として地方自治体史に参加するようなことは今ではほとんど行われていない。その意味においても、今回、自治体史編纂作業に関わることができることを有り難く思っている。

さて、自治体史の編纂において重要なことは資料である。今回の対象である明治期の資料は、戦災などの影響を受けたものがあるとはいえ、それ以前と比べると量としては恵まれている。そこで以下では、近現代の政治行政に



■ 旧法務省本館 (通称「赤れんが棟」)

関連する資料に関連した希望等を、紙面の都合から三つ取り上げたい。

### ① 建物

今年度はJR東京丸の内側の赤レンガ駅舎が大正期の創建当初の外観に復元されて話題を集めた。また、明治期に建てられ、戦災によってほとんど消失した旧法務省本館(通称「赤れんが棟」)も平成に入って復原改修工事が行われた。愛知県においては、建物の保存・

展示に関しては明治村があり、その他にも大正から昭和にかけて用いられていた旧名古屋控訴院(現名古屋市政資料館)に保存・復原修理工事を行い、名古屋市の公文書館として利用している。歴史的な建物の保存・修復工事は少なからぬ費用が必要であることから、基準を満たした建物についてはすべて保存すべきだとは言えないが、多くの人にとってわかりやすい資料であるため、今後できるだけ残り残してもらいたい。

### ② 判決原本

裁判官が作成する判決書は、司法制度に関する重要な資料である。判決原本については、法制史を学び始めた学生時代に保存をめぐる動きがあったため、強く印象に残っている。保存活動のきっかけは、平成二年に最高裁が、保存場所の不足と利用が殆どないことから、民事判決原本の保管期間を五〇年と定めたこと、つまり判決原本は五〇年後には順次廃棄されることになったこ

とである。同様のことは図書館でも行われており、書籍の保存場所が十分に無いことから利用の少ない書籍を廃棄されている。本が好きで、研究者としても現役中に何らかの形で関係した書籍を二桁は持ちたいと考えている私にとっては、理由がどうであれ書籍を廃棄する行為は望ましいものではない。いわんや判決原本という代替性の無い一級資料を保存場所の問題で廃棄するという決断に対しては見識を疑ったが、その後、永久保存することが決定し、国立大学での一時保管を経て、現在では国立公文書館に移管されている。ただ、判決原本については、保存場所の問題だけでなく、利用が殆どなかったことも廃棄理由として挙げられていたように、資料を利用することも、資料を受け継ぐにあたっては重要なことである。したがって法制史研究者としては、廃棄を回避できたから一件落着とするのではなく、今後も継続的に保存された資料を用いた個人ないしは共同研究を行っていききたい。

### ③ 公文書等

公文書等は国及び独立行政法人等の諸活動および歴史的事実の記録であり、現在は「公文書等の管理に関する法律」に基づいて管理されている。同法の目的は、公文書等が国民共有の知

的資源として、国民が主体的に利用できる様に、行政文書等の適正な管理および歴史公文書等の適切な保存・利用などを図るとともに、国及び独立行政法人等の諸活動を、現在だけではなく将来の国民に説明する責務が全うされるようにすること、である。私が研究などで用いる公文書等は戦前のものが中心であるが、今後、戦後の公文書を研究に用いることもあろうし、現在の行政における公文書が将来の国民にとって重要なものとなっていくことは言うまでもない。公文書を作成する人にとつては、後日行政の誤りを指摘するために用いられたい、そうでなくとも日々の業務で多忙を極めるため公文書等を作成することが面倒に思われることもあるだろう。しかし、人は間違いも少なくするために、そして間違いによる被害を減らすためには過去の資料が必要があり、その際には過去の資料が必要になってくる。そのような場合に備えて、今ある資料についてはできるだけ良い状況で保存するとともに、多くの人に公開されることを、そして、今作成された公文書等の資料については、できるだけ正確に作成され、そして適切な方法で保存されることを期待している。



■ 「赤れんが祭り」時に著者撮影

と、つまり判決原本は五〇年後には順次廃棄されることになったこ

# 「専門」の限界と魅力

人文学部 准教授  
経済史  
堀内 義隆

1

「私の専門の魅力」というお題を与えられたわけであるが、はて専門に魅力などあったかな、と考え込んでしまった。私の専門は経済史だということになっていく。実際に大学院生の時から経済史の研究をしてきたわけだし、経済史を教える教員として三重大学に雇ってもらったわけだから、そのことに不満のあるはず



学問における専門とは特定の領域に関する高度な知識や技能であると理解されているからである。私が尊敬する社会経済史家で一橋大学の学長も務めた増田四郎は著書の中で「自分は素人である」と繰り返し述べている。私は増田ほど賢くも偉くもないがこの態度には共感する。

起き、四月に初めての子供が生まれた。この社会的事件と個人的事件が重なったことで、私は子供の放射能被曝をいかに避けるかという問題を通じて、自分のあり方に深い反省を迫られた。

ひとつには、子や孫の世代に良い社会を残すことの重要性を心の底から感じるようになった。もちろん以前から理屈ではわかっていて、ところが、実際に自分が育児をする身となり、色々な場で多くの子供に接する機会が増えると、「次の世代」というものが具体的な姿をとって現れるようになり、真剣に子供達のことを考えるようになった。そして、原子力発電所などという危険極まりないものを無反省に放置した「上の世代」に対する怒りが生じてきて、「次の世代」にそんなふうに使われたくはないという思いを強くした。

もうひとつには、放射能被曝の危険性について様々な分野の専門家たちが様々な立場から様々な主張をしていることに、情報の受け手としてかなり困惑した。よく知られているように、放射能被曝の影響は年齢が低いほど大きい。自分だけならそれほど気にならなかつたかもしれないが、子供のための対策はしないでは

もない。しかし、どうも私は「専門家」というものになりたくないの

ある。それは「専門」がえてしてタコツボ化に結びつくという恐れを抱いているからである。私が尊敬する社会経済史家で一橋大学の学長も務めた増田四郎は著書の中で「自分は素人である」と繰り返し述べている。私は増田ほど賢くも偉くもないがこの態度には共感する。

学問における専門とは特定の領域に関する高度な知識や技能であると理解されているからである。私が尊敬する社会経済史家で一橋大学の学長も務めた増田四郎は著書の中で「自分は素人である」と繰り返し述べている。私は増田ほど賢くも偉くもないがこの態度には共感する。

いられない。私は、専門家たちが発信している互いに矛盾した情報を自分の判断で取捨選択しなければならなかつた。

4

ひとりひとりが人任せにせず自分で判断を下す力をつけること、これが社会を健全にする唯一の道である。これは言うは易く行うは難い。かつて、現場の知識の重要性を強調したハイエクやドラッカーなどの社会学者もいたが、社会的分業が高度に発達した社会で、個々の現場の情報をどのように組織化し活用できるようにする

能はある程度の時間を費やして深く訓練を受けることによって初めて身につく。ただ、深さは狭さとトレードオフであり、特に、社会というとてもなく複雑なシステムを対象とする研究の場合、狭さは大きな弱点ともなる。

2

学問をするうえで、専門よりも問題が先にあるべきである。専門とは先人が彼ら自身の問題を考える過程で残した痕跡にすぎない。それは、後から新たな問題を考える者にとつては思考の助けとなるありがたい教えであるとはいえず、そのもの自体に絶対的な価値があるわけではない。

私が学生の時から考え続けてきた問題は、抽象的に言えば「社会の発展」とは何かということである。人間にとつて「社会の発展」がどのような普遍性を持ち、どのような方法でそれが法則的に捉えられるのか、というような問題である（もしかすると「発展」という観念そのものが普遍的ではないのかもしれない）。そのような問題を、具体的には東アジア経済の近代化の歴史研究を通じて考えようとしてきた。東アジアを

か、それらの情報をどのように個人が総合できるのかということは、依然として難問のままである。

私は学生向けに「専門の魅力」を説明する際に「社会の全体像を把握すること」が「専門の魅力」を説明する際に「社会の全体像を把握すること」と言っている。しかし、実際には「問題」を抜きにした全体像などありえない。歴史とはE・H・カーが

言うように「過去と現在の対話」であり、現在の自分の位置を確かめることに最大の存在意義がある。過去を知ることににより現在の状態が絶対的なものではないということを知り、現在起きている諸問題の根源・本質を知ることができる。歴史を学ぶということとは、ひとりひとりの個人が自分の問題を認識し、未来に向けて解決してゆくために、自分だけ



■ 著者のフィールドでもある台湾の街並

研究対象とすることで西洋を相対化することができる（社会科学における西洋的価値観の浸透はかなり根強い）。経済という視点から研究することで民衆の労働や生活を社会変化の重要な要素として捉えることができる。そして歴史研究によって長期的な視点から社会の発展について考えることができる。

3

こうした様々な「魅力」が経済史という専門分野にあることは間違いない。ただ、問題そのものは都合よく「専門」という枠に合うように存在してくれているわけではない。専門に囚われてしまつては見えなくなつてしまつてもある。そのような時に、自分の履歴や立場を顧みずに専門領域を踏み越える勇気が欲しい（そしてそれを許す環境が大学にあれば最高だ）といつも考えている。

タコツボ化への批判として盛んに唱えられるようになった学際的研究は、個人の中で消化されてこそ意味がある。

ところで二〇一一年は私にとってかなり大きな転換の年であった。三月に東日本大震災に伴う原発事故が

の歴史像を作つては壊したまた作るといふ作業の繰り返しである。問いつける姿勢こそ価値がある。それは「歴史は暗記」などという通念からは最も遠いところにある態度である。私としては、ここに自分の「専門」の最大の魅力を感じているし、教育において学生に最も伝えたいことでもある。

（ほりうちよしとか）

# 三重大学と 地域活性化

中外医薬生産株式会社代表取締役社長  
上野商工会議所副会長  
三重大学伊賀連携フィールド運営委員会副委員長

## 田山 雅敏

昨今、大学の在り方が大きく変わりつつある。いわゆる産学官連携もその一つの変化であり、大学が独立行政法人として自らの道を模索しはじめたことも大きな変化である。我々大学の外にいる人間は、大学とは最終高等教育機関としての

位置づけに重きを置き、大学教授としては専門性に特化した頭脳集団であるという思いであった。おそらく、自分が学生の時の大学感をそのまま引きずっていたせいかもしれない。大学は、象牙の塔であってしかるべき時代はもう終わっているかも知れない。それは、社会も大学自身も今まで大学の持つている力をよく判っていない。大学の敷居は高いと言われ続けてきたし、大学もその持てるものが社会の発展にどのように寄与するか判っていないように判っていない。そして実践も乏しかったのである。社会に有為でない研究には、時として補助金があることが難しい時代となってきた。何が有為かは大いに議論のあるところであるが、一言でいえば、客観性重視で研究の優先順位が決められてい



■ 上野商工会議所地域活性化センター内に開設された「三重大学伊賀連携フィールド」  
(写真左が筆者、右は樹神成人文学部長)

くこととなる。裏返せば、社会に貢献しないであろう研究には、補助金は出にくくなることとなる。教授受難の時代の始まりであり、淘汰の時代の幕明けとなる。今、あらゆる分野におけるガリバー企業は短期的には国内需要の低迷から抜け出せないでおり、中長期的には危機感の中で事業構築を行いつつある。ガリバー同士の提携、合併、不採算事業からの撤退、そして新興市場である海外進出と、いとまがない。それも残された時間はそれ程あるわけでもなく、あらゆる先進国企業間とのし烈な競争に身を置かざるを得ない。売上が上がらなくなった今、いやが応にも利益主導体制に変わらざるを得なくなった。一昔前の売上アップが利益アップという同意語であった時代は、売上を上げれば利益がついてきた。今、下手をすれば利益が下がってきた。「売上の時代が現実となり、増収減益企業が輩出する事態となった。従って、減収増益型も大いに選択肢の中に組み込まれつつあるのである。大学教授の中には、企業は利益を上げることが目的であると思っておられる方もいる。答えは、否である。私流に言えば、利益を上げることが手段であり、目的は適正な利益をどのように配分していくかということである。配当内部留保、設備投資、従業員還元等々、これらはすべて利益があつてできる術である。利益のないところ何も将来に積み

増しはできない。ただ、資本の劣化を招くだけである。多くの善良な経営者は、納税のち残った50数%の利益をどのように使うかに多いに苦心をし、将来への企業経営に最も効果的手法を編み出す努力を行う。大学においては、その決算書は中々難解で一般には理解しにくく、例えば、企業の損益計算書に近いものでは、消費収支計算書の中の帰属収入の合計が企業の売上高に相当することとなる。ここから、消費支出の合計を引いたものが利益であると読み取れる。しかし、大学法人の場合、この利益は将来の投資のために色々な形で積立をして損益トントン位にしておくのが、一般に健全と言われている。私の経営する製薬会社でも、研究開発と生産設備の拡充は必須項目であり、この原資の一つである利益確保は手段として日々の業務の中で従業員にその必要性が浸透している。このように、企業は勿論のこと大学においても、成果としての利益確保なくして存続は難しくなりつつある。その利益を確保するのは、正に人材であり人財である。

中堅中小企業に於いて、人材の確保は永く困難を極めた。今は、価値観の多様化等と大企業志向の状況も徐々に緩和され、優秀な学生を採用できる扉は開かれてきた。その昔、津で商工会議所主催の県内企業の就職説明会が行われた。この種の催しは、今はもっと盛んに行われて

いるが、私も自ら率先して参加したことがある。その時、私は一人の三重大学学部生をなんとナンパしたのである。私は彼を説得し当社に入社することを強く勧めた。彼は悩んでいたようであるが、私の熱気に根負けしたのか、結局当社へ入社した。その彼も三十五歳である。今、当社の中堅幹部としてどこに出しても恥ずかしくない社会人となった。社内結婚をし、二人の子供にも恵まれている。その後彼の勧誘もあり又彼を指導していた教授のご厚意にもより毎年三重大学工学部より一〜二人の学生が入社し、今では十人近い工学部出身者が当社にいる。他学部からも多くの卒業生がおり、三重大学は当社の中ではなくてはならない存在である。スタートは誰も知らないが前述の私のナンパなのである。その位優秀な学生の採用に当時は苦労していたのである。私は彼を採用の時に、正に社運を賭けるがごとくその会場であらゆる学生を観察して、彼に目をつけたのである。事前に彼が当社のブースに立ち寄っていたため、最低の情報は頭に入れてあったので判断も早かった。昨今は三重大学の多くの学生が当社に受験にみえるが残念ながら断腸の思いでお断わりする学生も増えてきた。毎年優秀な学生を頂き感謝に絶えない。世の中が目まぐるしく動く中そして当社に働く大学卒や大学院卒の学生に大企業で学ぶ同じ新人の倍以上の速

さで多くのことを教えていくのが当社のモットーである。入社二〜三年になると、私が会長を務める三重県の薬事工業会の事務局長を務めさせる。これは一年間であるが県内の製薬企業の技術管掌役員や企業の責任者として県薬務当局の幹部と知り合いになれば、名前も覚えてもらえる。勿論、三重大学の先生方にも学生時代には、口もきくことができなかつた偉い人とも、お会いできる。色んな人を知り合うことで本人の視野も大きくなる。今、当社の購買担当に2人三重大学がおり、2人で仕入品の殆どの購買を任せている。また、財務担当責任者は教育学部卒の三十四歳の女性である。入社前より当社への採用を強く希望し、念願叶って財務の仕事に就き今ではエキスパートとしてルーティンの仕事は殆ど彼女が取り仕切る。彼女の今の課題は「財務から会社を変える」であり私は多いに彼女の成長を楽しみにしている。

時代は変わり、三重大学の中にも、優秀な学生が人生の選択肢として中堅中小企業を視野に入れそして地域の活性化に向けて活躍している。私は県が推進するメディカルバレー事業等を通し多くの三重大学の先生方とお知り合いになり交流を深めることができた。ナンパの時代はもう終わったが、学生諸君の中に当社のような中堅中小企業で働くことで自己実現を夢見る学生が増えてきたことは、大変

な喜びである。そして彼等の自己実現ができる舞台を作ることが自分の仕事と心得、日夜奮闘している次第である。又、私は地域イノベーション学研究科での設立時より学外教員としてここ数年間年五〜六回程度教鞭をとっている。そして学生達には社会の現実と理想のギャップを常に話して、そのギャップをどのように埋めるかを考えさせるようにしている。そして真剣に実社会へ出てからの心構えを説くようにしている。

三重大学は教育の場である大学と共にその有為な人材を地域の企業や社会に輩出する試みは当社において大成功している。そして地域活性化と企業発展に貢献できれば大学の使命は益々高まっていくことは必至である。三重大学の理念が大学に行った時よく目にとまる。そしてその主旨を理解しつつ教壇に立つており、色んな先生方ともその気持ちで接している。今回、人文学部と上野商工会議所が提携し、地元の伊賀市のサポートを得て伊賀連携フィールドを開設した。樹神学部長をはじめ先生方のご努力により事業を開設することとなり、本年度が初めて「忍者」を中心としたテーマで事業展開をしており、今後伊賀の街作りや市民講座の開設を行うことで大学が大いに貢献してくれることを期待している。私もこの事業に積極的に関与し大学の新しい試みを成功に導いていきたい



■ 開設の記者会見 (2012年6月ハイトピア伊賀にて)

## 特集2

### 三重の文化と社会

# 鳥羽市・三重県の研究

三重大学大学院人文社会科学研究科の授業科目「三重の文化と社会」がスタートして、今年で12年目になる。本科目は、三重の文学・歴史・思想・社会・地理・環境・地方制度・地方自治・地域産業と経済などを総合的に考究し、地域の文化と社会の特色を明らかにすることを目的とし、毎年、県下の市町村から1つを対象地域を選んで実施している。本科目の特色は、大学院生が自らその地域に関する研究課題を設定し、フィールドワークを行うことで、実践的に調査・研究能力を養うことができる点にある。また、5年前からは、こうしたフィールドワーク型の研究に加えて、県内全地域を対象として、主に文献・資料をもとに調査・研究を行う文献型の研究も展開している。

三重大学では、学生の主体的な問題発見・解決能力を涵養するPBL(Problem-Based Learning)教育を推進しているが、本科目はPBLを導入した

特色ある大学院教育として開設されている。同時に、大学院生が調査を通じて地域の人々と交流し、また現地発表会を行って研究成果を地域に還元するなど、大学の地域連携・貢献の一助となることを意図していることも、本科目の特色の一つである。

昨年年度までの香良洲町、紀伊長島町、亀山市、関町、志摩市阿児町、伊賀市、鈴鹿市、松阪市、四日市市、津市、伊勢市、名張市に続き、本年度は鳥羽市を調査対象地域とした。

例年通り、本年度も月1回程度の研究発表を基本としつつ、6月には予備調査として鳥羽市においてジェネラルサーベイを実施し、受講者各自の研究テーマや研究方法を明確にした。9月には答志島において現地合宿を実施し、受講生が各自の研究の進捗状況を報告するとともに、大学院生・教員間の交流を図った。

その後、大学院生が独自に現地での聞き取り調査や資料収集を重ね、指導教員の指導のもと、研究発表や討論を経てまとめあげた成果が、以下に掲載する研究報告である。

#### 科目担当教員

森 久綱 (人文学部准教授)

綾野 誠紀 (人文学部教授)

## 地域研究フォーラム in 鳥羽：三重大学大学院人文社会科学研究科「三重の文化と社会」研究成果報告会について

2013年1月26日(土)の午後1時より、鳥羽市民文化会館大会議室において、「地域研究フォーラム in 鳥羽：三重大学大学院人文社会科学研究科「三重の文化と社会」研究成果報告会」が開かれた。本年度は、1部を学生による報告、2部を本研究科塚本明教授による基調講演とし、2部の最後では全体討論を行った。当日は、約45名(報告者・関係者を除く)の参加者があり、全体討論の時間には、活発な意見交換が行われた。本科目を受講した大学院生にとっては1年間の研究成果をいかに地域に還元することができるのかを考える貴重な機会となった。なお当日は、2011年度「三重の文化と社会」研究報告書『名張市・三重県の研究』が、参加者に配布された。

## 鳥羽における石信仰

### ―盃状穴を中心として―

今井 薫

指導教員 山田 雄司

#### はじめに

鳥羽は三重県のほぼ中央を東に突出する志摩半島の北東部にあり、伊勢湾の入口に位置しているため、古来より海上交通の要地をなしてきた。このため庫蔵寺をはじめ、隣接する伊勢市とのあいだには朝熊山金剛證寺、志摩市との間には青峯山正福寺など、海民信仰の対象となる寺院がある。

また、海を控えた海村地区には海神すなわち竜神信仰が強く、一年の無事と豊漁を願ったものや海での漁の安全を願ったものなど、祭や生活の中にその要因をみることができる。その信仰は水、

山、石などの自然物を対象とするものであった。

特に、日本人は古来より堅固で不動の永遠性を持つ「石や岩を「神の宿るもの」「魂の容器」として崇拜し、自然石を積み、石を積み、石造物を作り、様々な信仰・文化の対象としてきた。ここ鳥羽においても盃状穴や丸石、積石といった石に対する信仰がみられる。

ここではこのような地域の現状をふまえ、海民による石の信仰について―盃状穴を中心として―見ていくこととする。

#### 1 盃状穴

##### ① 盃状穴とは



■ 鳥羽の石信仰の分布図

神社や寺院の手水鉢や石段といった石造物に人為的に掘られた「盃状の穴」を言う。穴は女性器を象徴したもので、生産と豊穣・再生の祈りが込められた民間信仰の一種とされる。起源は旧石器時代まで遡るといわれ、世界各地に存在し、西洋では「カップマーク」と呼ばれている。また海中にあったとき付着し、生息していた動植物に浸食され、無数の穴がある水蝕石も、盃状穴と同祖の信仰であるとされる。

#### ② 盃状穴研究の歴史

昭和55年5月に神田山1号墳の古墳蓋石(被葬者の脚上部分)に人為的に穿たれた21個の凹穴が発見された。これを梅光女学院大学教授、国分直一博士が「盃状穴」と命名し、雑誌『えとのす』などにおいて報告したことから日本での盃状穴研究がはじまる。

盃状穴は古くは古墳の石棺等に見られるが、その多くは中・近世の石造物(手水鉢、常夜灯、石段、鳥居、道標など)に存在している。

盃状穴の穿たれた目的や意味は不明で解明されていないが、前述の様に一般的には生産・豊穣・再生、病氣平癒などを願って穿たれたものでないかと推測される。

#### ③ 盃状穴の分類

##### ① 一義的盃状穴

縄文・弥生時代から古墳時代に穿たれたもので、国分直一博士が命名された盃状穴を指す。この遺品は、神田山1号墳石棺蓋に見られるよう、発掘された時点での確認が重要である。石棺が移動された後に穴が穿たれたことも考えられるからである。そのため、確かな発見例が最

も少ない。

但し今後の研究において、古代祭祀場跡の盃状穴をして立証(状況複合立証も可能)されるもの含む。

#### ② 二義的盃状穴(前半期のもの)

第一義的盃状穴以降、奈良・平安の律令時代に始まり、主として鎌倉時代後期から江戸時代前期迄に穿たれたと推測される遺品。

#### ③ 二義的盃状穴(後半期のもの)

幕藩体制時代から近代、明治・大正に穿たれたもので、主に神社仏閣の常夜灯・手水石・基壇等に穿たれて、現在多く散見されるもの。

#### ④ 形式上による分類

##### 第一類 円型盃状穴

##### A 典型的盃状穴

##### B 独築型盃状穴

##### 第二類 変形盃状穴(円形を呈さないもの)

##### A 多角形型盃状穴

##### B 切込みを持つ盃状穴 ①紡型

##### ②木の葉型 ③切り込み型

##### 第三類 有溝盃状穴(穴に側溝を有するもの)

##### A 側溝型

##### B 連結溝型

#### II 鳥羽に見られる盃状穴の分布

鳥羽市史と三重県宗教学人名簿から作成した神社・仏閣一覧より、実際に調査を行った。確認された鳥羽の盃状穴のある神社・仏閣は以下のものが挙げられる。

- ・神明神社(相差) 手水鉢(文政四年)30個
- ・大江寺(浦村) 手水鉢20個
- ・浦神社(浦村) 石段2個

- ・石鏡神社（石鏡） 石段1個
  - ・圓照寺（石鏡） 境内の石2個
  - ・八幡神社（桃取） 石段1個
  - ・賀多神社（鳥羽） 社務所前1個
  - ・堅神神社（堅神） 本殿石垣2個
  - ・宝珠寺（堅子） 洗米石
- また、この他に丸石や積石、水蝕石など、石への信仰がみられた神社・仏閣として以下のものが挙げられる。
- ・八代神社（神島） 水蝕石
  - ・桂光院（神島） 水蝕石
  - ・加茂神社（松尾） 丸石
  - ・伊射波神社（安楽島） 丸石
  - ・土宮神社（小浜） 水蝕石

これらを鳥羽市の地図に当てはめ、作成したのが図1の分布図である。

「海岸部の神社・仏閣」、「青峰道・磯部道」といった青峰山正福寺に通じる海民信仰の道」の二点から見ていきたいと思う。

① 海岸部の神社・仏閣

図1より、鳥羽にみられる石信仰は、海岸部に分布していることがわかる。ここでは海岸部でみられる盃状穴や石信仰についていくつか見ていきたい。

① 相差町堅子地区の「洗米石」

相差町の堅子地区には、「洗米石」と言われる石に穿たれた穴5個に洗米を供え、様々な祈願をする風習が残っている。彼岸過ぎには浜施餓鬼回向があり、海に向かつて4つの石、小豆、米、酒を投げ入れることで海の生物・水難者の供養が行われる。

ここで使われる「洗米石」は、今まで穴が穿たれていた岩が堤防建設の場所にあったために撤去されてしまったので、新しく三代目として平成十二年に作られ



■ 左上：三代目盃状穴／右上：大江寺盃状穴／左下：白髭神社／右下：伊射波神社

たものである。直径30cm、厚さ10cmの大きさで、表面に直径4cmの窪み5個がセーマン（海女の魔よけとされる星形）状に穿たれている。

② ツンジンさん

神明神社宮司の大田清博氏宅に「ツンジン」さんと呼ばれる「穴のあいた石」をご神体とする屋敷神の信仰がある。大晦日に行う豆まきの際にはご神体の穴に豆を、正月には膾などもお供えする。そこには古いお札なども入れられている。

③ 神明神社薬師堂の御供石

相差町の神明神社境内の薬師堂には、穴のあいた石をお供えして祈願すると、海女などが患いやすい耳の疾患や・臍下（女性器）の病気が平癒するという、御供石の信仰がある。

④ 伊射波神社と白髭神社

志摩国一の宮である伊射波神社では海に面して建つ鳥居の元に、丸石や自然に穴の開いた石が多く置かれている。

また、菅島の白髭神社ではしるんご祭の際、海士が海中より十二個（閏年は

十三個）の丸い白石を神社の境内に納める風習があるという。

② 青峰道・磯部道といった青峰山正福寺に通じる海民信仰の道

これらの街道には盃状穴をみつつけることができなかった。

しかし、積石信仰をみる事ができた。積石は、海が一望できる巨石や、山が拓けた丘の上に多く見られたため、海への信仰との関連も考えたが明確にはならなかった。

③ その他

① 加茂神社

図1より、鳥羽道の加茂神社に丸石の信仰があったことがわかる。これは加茂神社が九鬼氏の霊代を祭る神社であるため、水軍を率い、海民でもあった九鬼氏の関係から、海民の信仰があったのではないかと推測する。

盃状穴は穿つ行為を人に見られると効験がないと考えられ、丑の刻参りや百日参りの様に、おそらく夜間に秘かに神社等に通い穿つたものとされている。また、明治になって、迷信禁止令が出た時に、神社等でも盃状穴をセメントなどで埋め、隠した例や、盃状穴のある手水鉢を破壊した例も見られる。

そのため、今回発見された盃状穴や石信仰が全てではないかもしれない。しかし以上の内容から、鳥羽市における盃状穴は、海や海士と関連し広まった独自の信仰であると言えるのではないだろうか。

おわりに

Iでは盃状穴が何であるかを最初の発見例と分類法により説明する。IIでは実地調査により作成した地図を使い、「海

のである。

② 皇族・外国人への宣伝

博覧会で好評を得ていた真珠ではあるが、真珠は奢侈品であるため、主に皇族、海外要人を対象にした宣伝戦略が練られた。これらの人物との関わりを持つことで真珠のイメージアップを図ると共に、輸出品としての販路拡大も視野に入れていたのだろう。

博覧会を計画的に養殖真珠の宣伝に利用し、皇族や外国人の顧客を得てきた御木本であるが、このような広報活動は決して無期限・無限定なものではなかった。「伊勢新聞」の記者との対談の中で、「来る四十七年とか八年とかに巴里でやる博覧会に出品すればそれで世界の広告を一通り終る事となる」と語っており、御木本は博覧会によって一定の宣伝効果を得た時点で、博覧会への出品を止めることを考えていたのである。かねてより鳥羽・志摩の景勝を世に周知させたいと考えていた御木本は、注目されるようになった「真珠」の名をもって観光客を集めようとした。いずれ鳥羽志摩地方の土産物として販売することも狙っていたのではなからうか。しかし、当時は誘客するにも交通網の整備が不十分であった。

II 鉄道の開通と真珠・海女

① 鳥羽線の開通

鉄道敷設の気運が高まる中、御木本は

岸部の神社・仏閣、「青峰道・磯部道」といった青峰山正福寺に通じる海民信仰の道」の二点から盃状穴や石の信仰を挙げた。鳥羽市においては盃状穴本来の信仰ではなく、「ツンジン」さんのような屋敷神として祭られるケースがあった。また、海岸部の伊射波神社鳥居下の穴のあいた丸石、相差の神明神社境内の薬師堂における御供石信仰などから、海・海民に関わる信仰のしるしとしての盃状穴の存在が明らかになったと思う。

奈良街道においては、旅の無事を祈って常夜灯・道標・山の神など道中の安全に関わるものに盃状穴が穿たれていることがある。三重県内における他地区についてもこういった、地域独自の文化と結びついた盃状穴がみられないか、機会があれば調べてみたい。

（いまい かおる）

人文社会科学研究所地域文化論専攻 歴史学

参考文献

- [1] 鳥羽市史編さん室『鳥羽市史・下巻』、1991
- [2] 橋本好史『民間信仰の証「盃状穴」』、2010
- [3] 橋本好史「伊勢市内（県内周辺を含む）における盃状穴について」『伊勢民俗』40、2011・9
- [4] 国分直一監修、国領駿・小早川成博編集『盃状穴考その呪術的造形の追跡』、1990、慶友社
- [5] 五来重『石の宗教』、2007、講談社
- [6] 岩田準一編『志摩のはしりかね』、1972、付載『志陽略誌』
- [7] 三重県郷土資料刊行会『志摩民俗・下巻』、1969

# 真珠産業の発展と近代鳥羽の観光地化

小川 真依

指導教員 塚本明

はじめに

古来より良港として名を知られた鳥羽は、その景観の美しさもまた有名であった。明治以後、伊勢や志摩を含むこの地域一帯の観光地化を目指して、様々な運動が起り、「真珠王」と称された御木本幸吉は、真珠産業を発展させる一方で、地域の開発を推進し、鳥羽の発展に尽力した人物でもあった。本稿では、御木本の真珠事業の発展経緯を分析し、それどのように鳥羽の観光振興と関わったのかを検討する。



■ 真珠博物館蔵新聞資料

I 御木本の真珠販売戦略

① 博覧会への出品

御木本は明治、大正期に盛んに開催された国内外の博覧会や展覧会などに、真珠やその加工品を意欲的に出品し、真珠の宣伝に努めた。その展示方法には工夫がなされ、多くの人々の注目を集めていた。一例を挙げれば、明治三五（一九〇二）年の第五回内国勸業博覧会開催中に出品物の盗難があり、御木本の出品物も盗まれたという事件がある。盗難に遭った他の出品者はいずれも、やむを得ず展示場を閉めるほかなかったが、御木本は急遽用意を整え、事件から三日後には盗難前と同様の出品物を揃えたのである。この迅速な対応は人々を驚かせ、盛況ぶりをより増すことになった。結局、この犯人は逮捕され盗難品は全て戻ってきたため、被害は無かったにもかかわらず、結果としてより多くの注目を集める事ができたのだ。後日、御木本は「結局少しの損もしないで非常な広告をしたようなもの」と語ったが、自ら広告を出さなくても新聞各社が記事にせざるを得ないような話題作りをし、それを宣伝に利用した



■ 個人蔵

湾を繋ぐことで、貨物の運輸と共に志摩地方の風光を紹介し、観光客を誘引することを目的としている。さらに志摩地方は交通網の不備によって海産物の販路が限定されているという現状の課題も挙げられた。同時期に鳥羽町に志摩鉄道の発起があつたが、両社は統合されることとなり、一三年六月に鳥羽町、鶴方村間の鉄道敷設の免許状が鉄道省より交付されることとなった。二社の統合により混乱が生じ、株式の募集も難航したが、御木本が千株を引き受け、昭和二（一九二七）年五月に社名を志摩電気鉄道と変更して、ようやく会社創立にこぎつけた。

志摩電気鉄道の敷設決定後に実地調査が行なわれたが、終点を鶴方浜から賢島に変更する案が急浮上した。参宮客の誘引のためには英虞湾内を開発する方が得策であり、そのためには鶴方浜より賢島の方が有利との考えからのようである。この終点地変更問題は、各村の利害対立から郡内を大混乱させたが、結局、昭和

四年に賢島への変更が認可されることで終結したのである。この問題に関して、御木本の直接的な関与は確認できなかったが、鳥羽線開通の頃より、将来的には鉄道で遊覧客を鳥羽から鶴方村へ引き込み、そこから

船で多徳島に招くことを構想していた御木本にとって、多徳島の目と鼻の先である賢島まで鉄道が延長されるというのは歓迎すべきことであつたはずである。

### Ⅲ 観光地としての整備過程

#### ① 御木本の国立公園構想

交通の整備が進み、鳥羽が観光地として整備されていく過程で、昭和五年頃から御木本を中心に国立公園開設運動が起り、御木本の構想がより具体的な形で表れるようになる。御木本は地方有力者の賛同を求め奔走し、同六年一月に内務大臣へ国立公園設立の陳情書を提出するに至つた。この一帯を国立公園にする理由として、景観が美しく遊覧に適していること、交通の便が良いことなどが挙げられたが、交通の便については、前章で述べた鳥羽線、志摩電の両鉄道の開通が大きいだらう。結局この陳情書は採択されなかつたが、伊勢志摩地方の国立公園開設運動の先駆けとなつたのである。

#### ② 伊勢志摩国立公園開設運動

国立公園開設運動が再び活発になつたのは昭和一七年頃からであるが、一九一七年には戦局の厳しさから国立公園業務は停止となつた。二〇年八月に終戦を迎え、連合軍総司令部のETOの承認を必要としたものの、国立公園事務は再開された。終戦後、伊勢神宮側は物資不足による盗伐などから神宮域を守る方法として、国立公園の指定を受け、その保護規則による神宮林の保護を希望した。しかし、その理由だけでETOに申請するわけにはいかなかったため、伊勢志摩が進駐軍の日本土産として人気が高い真珠の養殖地であるということも挙げて、国立公園指定の必要性を説明した。

昭和二一年一月、ついに伊勢志摩国立公園の指定が決まり、御木本は「私は一生の事業である真珠の生産に魂を打ち込むことによつて今後も国立公園に大きく寄与したい」と喜びを語っている。翌月には伊勢志摩国立公園の指定祝賀会が鳥羽町で盛大に開催された。久米正雄ら文化人による志摩八景の発表や、伊勢志摩をテーマとしたシャンソンの演奏、鳥羽駅前の海岸では海女による真珠採り作業などの余興も行なわれた。志摩八景には「多徳島の真珠」も選ばれており、鳥羽志摩の宣伝において「海女と真珠」が代表的なものとして確立していったことがわかる。

#### おわりに

御木本は鳥羽と伊勢、志摩一帯の観光地化を推進し、その運動は真珠産業の発展と共に進められた。博覧会に出品することで真珠を広く宣伝し、後に観光客への販売を狙って鉄道敷設に協力し、更なる観光地化を目指して国立公園設立の運動を推進したのである。

近代鳥羽は御木本の戦略により真珠と共に宣伝され、観光地として確立していったと言えるだろう。鳥羽・志摩地方では、鉄道は誘客と海産物の輸送の便を図るという意味も持ち、その敷設には地元住民も熱心に運動した。国立公園の指定にも、真珠の産地であることが利点となつたことは明らかである。

鳥羽志摩を訪れる人々に対して、御木本は海女の真珠採り作業を事あるごとに披露した。このことが今も続く鳥羽観光の象徴である「海女と真珠」につながっていくのである。

（おがわまい）

人文社会科学研究所 地域文化論専攻

歴史学

#### 参考文献

- ・竹岩蔵『御木本幸吉』（培風館 一九四八）
- ・大矢田三郎『志摩電鐵秘史 附鶴方村之紛擾』（非売品 一九三二）
- ・『御木本真珠発明100年史』（株式会社「キモト他、一九九四）
- ・『鳥羽市史下巻』（鳥羽市、一九九一）
- ・真珠博物館蔵新聞資料

## 鳥羽藩領における 鰯漁の特質と変容

杉山 亜有美

指導教員 塚本明

### はじめに

三重県の南東に位置する志摩半島は、広い海域と豊かな漁場に恵まれた漁業地域である。江戸時代にこの地域一帯を支配していたのは鳥羽藩であつた。田畑に乏しく、領地は三万石と狭小で、その大半が漁村であつた鳥羽藩にとつて、漁業からどのように利益を「収奪」するかが重要な課題であつた。そこで鳥羽藩は、他藩には見られない特別な形態として、藩が直轄する大規模な藩営鰯漁を行い、それにより莫大な利益を得ていた。

本研究は、鳥羽藩が行つた藩営鰯漁の特質と、近代移行期における変容について明らかにすることを課題とする。

### Ⅰ 藩営鰯漁の特質

鰯は季節的群遊を習性とする回遊魚で、志摩半島には冬期に鰯の群遊が見られた。志摩半島の入り組んだ地形が鰯漁の絶好の漁場となり、一帯では大量の鰯が捕獲できた。鰯漁は、長方形の網を水中に沈め、魚群が網の上に来た時に水中から引き上げて捕獲する敷網漁と、大網で内湾を立て切り、湾内に閉じ込めた魚群を捕獲する楯網漁の二種類の漁法に大別されるが、

年代	漁獲高	代金	上納高
天保 8(1837)年12月～天保 9(1838)年3月	234,976本	612両1分	229両2分
天保 9(1838)年11月	27,143本	96両2分	34両1分
天保10(1839)年12月～天保11(1840)年2月	14,645本	157両	61両3分
天保11(1840)年12月～天保12(1841)年2月	67,062本	68両2分	24両3分
天保12(1841)年11月～天保13(1842)年2月	53,806本	219両3分	79両3分
天保13(1842)年12月～天保14(1843)年2月	625,131本	381両2分	141両3分
天保14(1843)年11、12月	31,044本	73両	25両3分
弘化 2(1845)年12月～弘化 3(1846)年1月	64,083本	118両1分	42両2分
嘉永 1(1848)年12月～嘉永 2(1849)年1月	140,891本	176両1分	63両3分
嘉永 2(1849)年11、12月	117,269本	130両	48両1分
嘉永 3(1850)年11月～嘉永 4(1851)年2月	18,064本	78両1分	31両1分
嘉永 4(1851)年12月～嘉永 5(1852)年2月	59,358本	294両	117両2分

■ 表 小浜村鰯楯漁の漁獲高と上納高（和歌森太郎編『志摩の民俗』より）

藩営鰯漁では後者の楯網漁が行われた。志摩半島の海域で獲れる鰯は、泥みがなく、特に冬季は最も脂の乗つた美味な状態であつたため、内外から高く評価された。漁獲された鰯の多くは伊勢の河崎や名古屋に運ばれ、加工・販売されたので、その販路も確立していた。

しかし、鰯は物音に敏感で、一度群が散乱すると元に戻りにくい特徴があり、

その漁獲には村内の漁民全員の協力や、参加村すべての連携が不可欠であつた。また、漁具や漁船などの漁にかかる資本も莫大で、漁期中は鰯を離散させないために、漁場では他の漁業を禁止し、廻船の出入りも規制しなければならなかつた。つまり、大きな利益を得られる一方で、それにかかる費用や他への影響が大きな漁であつたのである。

表に見るように、小浜村では天保八（一八三七）年十二月から翌年三月までの間に、二万四千九百六本もの鰯を漁獲し、二二九両余りを藩に上納した。安政四（一八五七）年の年貢金が四五五両であつたので、この額は年貢金の半分以上にのぼる。また、藩はこれとは別に鰯漁に伴う運上金も上納させており、小浜村以外にも鳥羽町、安楽島村、浦村などに好漁場をもつ鳥羽藩にとつて、鰯漁による上納金が苦しい藩財政を支える重要なものとなつていった。

鰯漁の重要性は村側にとつても同様であり、鰯漁は村内で最も大切な漁事として認識され、その収益によつて年貢を皆済することさえもあつた。

### Ⅱ 漁の収支構造

鰯漁による藩と村の収支構造はいかなるものであつたのか。「小浜漁業協同組合文書」、「本浦地下文書」（ともに海の博物館所蔵）を分析すると、藩の支出は無いに等しいが、運上金や漁獲純益の半分を

村から収奪することで、収益は多額にのぼつた事が分かる。これに対し、村の収益は労賃と漁獲純益の半分であり、合わせても全漁獲売上高の六割弱であつたが、支出は運上金、造用金に加えて、船や網等の資本や楯網漁時に出役する藩役人への接待費などの漁事にかかる費用までもが村の負担となつていった。その上、村の有力者や商人などへの支払いを差し引くと、個々の漁民の収益は全漁獲売上高の二割から三割の労賃だけに留まつたと推測される。

藩営鰯漁は、藩にとつては大きな収益を生んだが、村にとつてはそれほど収益にならなかつたように見える。村の収益の実態を、鰯楯漁中に発生した漁業争論事件を通じて考えてみたい。

安政六（一八五九）年に、浦村で鰯楯漁中に「不正」が発覚するという事件が起きた。鰯楯漁事の際には、内湾を立て切つた後、真ん中から内湾両端の陸まで船二艘で網を引くことになっており、この網の引き役六名を、浦村から喜助ほか三名、残り二名を安楽島村の権左衛門と此八を、喜助を通じて雇つていた。引き役は網引きが終わつた後は速やかに引き上げる手筈であつたが、喜助、権左衛門、此八は勝手に網を積み込み、密かに漁を行つていた。ところが、湾内で漁をしていた坂手村の与之助の網と絡み合い、口論にまで及ぶ騒ぎになつてしまつたので



■ 鯛桶網漁法之図 (『三重県水産図解』より)

ある。騒ぎを聞き付け、駆け付けた藩役人が、それまでの様子や名前を聞き出し、船具や網などを取り押さえ、翌日取り調べを行う事でその場は収められた。取り調べでは、三人は合計で五六反もの網を積み込み、その網には五六本の鯛がかかっていたことが判明した。

この事件では、漁事中は藩役人が取り締まっていたにも関わらず、「不正」が行われていたことが分かる。喜助たちが五六反もの網を使っていたら、その場に居合わせた者は当然それに気づいていたはずであるが、何も報告がなされていないことを考えれば、村も藩役人も承知の上で「不正」を見逃していたものと思われる。つまり、藩に鯛漁の利益を制度的に収奪される漁民が、その損失分を補填

するための実質的な権利として、「不正」が恒常的に成り立っていたのではなからうか。そして、喜助たちのように争論によって偶然に発覚してしまった場合にはのみ、「不正」と扱われたのであろう。

村の収益は、表向きは漁獲売上高の六割弱であったが、他に「不正」による収益があり、それは表向きと同等か、その倍以上にもなったのである。

### Ⅲ 近代移行期における変容

明治政府は新たな統治体制を確立すべく、旧幕府の統治体制であった藩を解体し、明治四(一八七二)年に廃藩置県を施行することで全国を统一的に治めようとした。藩の解体により藩営鯛漁も消滅したが、漁業権の所在が明確になるまでの過渡的な処置として、桶漁を行う内湾を所有する村による「請漁制」(個人あるいは村が特別漁業税を支払う事によって漁事を請け負い、漁業権を行使する制度)が行われた。

明治政府による新たな漁業政策は、「旧慣」を崩し、漁民たちの間に混乱と対立を起こしていった。鯛漁においては、「旧慣」を維持しようとする浦村と、自由な漁を行おうとする安楽島村との対立が表面化していた。「旧慣」には、魚路確保のため、安楽島村は浦村が漁を行う以前には漁をしてはならないことが約束されており、そのため安楽島村は収益の機会を逸していたのである。

両村の対立は次第に泥沼化していき、明治二九(一八九五)年には裁判にまで持ち込まれる大事件となった。浦村は、安楽島村が浦村の漁事以前に漁をしないことは浦村の漁業上の特権であると主張したのに対し、安楽島村は、特権など存在せず、「旧慣」も旧藩主の権限により行われたことで、藩が廃絶した後は遵守する義務はないと主張した。

裁判の判決は、浦村の特権があったことは認めるが、それは旧藩主の行政権により与えられたものであって、人民相互の契約に基づくものではない、安楽島村も当時の主権のもとに制限を受けており、廃藩置県と共に「旧慣」遵守の義務は廃滅した、浦村の主張する特権は旧藩の制度と共に消滅し、今更それを適用することは不可能である、というものであった。裁判所は安楽島村の主張を採用するからちで判決を下したのである。この時点では、すでに藩営鯛漁の形態は変容してしまっており、旧慣を維持することは不可能であった。この裁判は最終的に大審院にまで持ち込まれたが、判決内容が変わることはなく、旧鳥羽藩が行った藩営鯛漁の形態は終わりを告げたのである。この後、明治三二(一八九九)年に両村で和解文が取り交わされ、長きに及んだ対立も幕を閉じた。

### おわりに

こうして江戸時代に鳥羽藩領で繁栄して

えてみる。

Aさんは三五歳、旦那さんは三九歳で共に答志生まれ答志育ち、二人は現在、答志在住で鳥羽市内に通勤している。

### Ⅰ 寝屋子が育む人々の繋がり

Aさんの生家は寝屋子を取っており、そのことを次のように話してくれた。

「私の実家は祖父が寝屋子をとっていたんです。だから、お正月とかお盆になると、早くに寝屋子を降りている(解散した)おじさんたちがみんな集まるんです。そして、お盆だと仏壇にお供えしてくれたりするんです。それから、私のおじいさんを「お父さん」として来てくれるのは、少し自慢でした。

おじいさんの子どもは私のお父さんとおばさんだけなのに、血の繋がっていないおじいさんたちが「お父さん」って呼んでるのは、自分としてはすごく自慢というか、そういうのはあります。でも、小さい頃の私にとっては、お正月にお年玉をくれるおじいさんたち、という感じでしたね。」

寝屋子という風習は男性が中心になっていると考えられるが、このAさんの、血のつながりがないにもかかわらず、寝屋子がAさんの祖父を「お父さん」と呼んでいることを自慢げに感じていたという証言から、答志出身の女性にとっても寝屋子が媒介する人と人の関わりは、と

た藩営鯛漁は崩壊し、各村が自由に漁を行う民営鯛漁へと移行していった。

藩営鯛漁は、窮乏した鳥羽藩の財政を支え、各村をも潤した。藩営鯛漁が大きな利益を上げることができたのは、藩の絶大な行政権の下で多数の村を漁事に参加させる大規模な漁ができたからである。個別漁業者、村全体、多数の村が「協業」するという形態こそが、単村では成し得ない大規模な漁獲をもたらした。また、藩営制によって利益が藩に収奪される中で、漁民は藩に屈することなく自らの権利を勝ち得ていた。

明治時代に入ってから、政府の新たな政策が漁民に混乱と対立をまねき、それまでの「旧慣」が崩れ始めた。その中で、鯛漁も争論の末に漁業形態は民営へと変容していったが、それでもなお村経済を支える重要な漁であり続けたのである。

(すぎやまあゆみ)

人文社会科学研究所地域文化論専攻 歴史学

### 参考文献

- ・中田四朗「近世の志摩における鯛漁業―鯛桶漁業の展開を主として―」(『海と人間』三、海の博物館、一九七五)
- ・中田四朗「三重県漁業史の実証的研究」(中田四朗先生喜寿記念刊行会、一九八七)
- ・和歌森太郎編『志摩の民俗』(吉川弘文館、一九六五)
- ・鳥羽市史編さん室編『鳥羽市史』上巻、下巻(鳥羽市、一九九二)

# 寝屋子と島の生活

## ―寝屋子を中心に― 編み上げる人間関係―

指導教員 武笠俊一

林拓斗

### はじめに

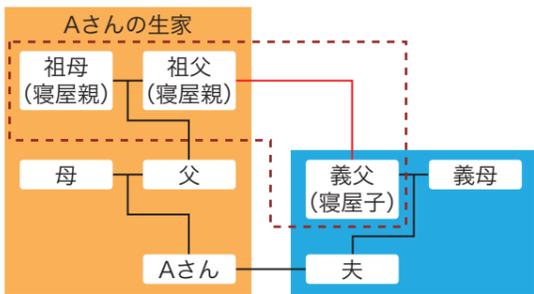
寝屋子とは、三重県鳥羽市答志島の答志地区に残る、中学校を卒業した男子、主に長男が、家族とは異なる家、夫婦の元で二十五歳頃まで同級生数人と共に寝るといふ風習である。子どもたちを「寝屋子」、寝に行く家を「寝屋」、寝屋の夫婦を「寝屋親」と呼ぶが、合わせて「寝屋子」「寝屋子制度」「寝屋制度」などと呼んでいる。

元来、寝屋子たちは毎夜それぞれの実家で夕食を取った後寝屋に集まり、朝起きるとそれぞれの実家に帰って朝食を取るといふものであり、四〇年程前まではそれが一般的であった。しかし、二〇年程前と最近に二度の大きな変化がある(表参照)。

このように、現代に到るまで変化しながらも脈々と存続している寝屋子であるが、既存の研究では寝屋子という風習の特徴からか、ほぼ全ての調査が寝屋子と男性の寝屋親を対象として行われており、女性からみた寝屋子について触れている例は皆無であった。そこで、本稿では昨年の春に寝屋親になった一人の女

集合頻度	寝屋子の内訳	解散時期
40年前 毎夜	漁師、あるいは家業を継ぐもので、長男がほとんど	寝屋子の誰かが結婚したら(25歳になる頃までには誰かが結婚していたためと思われる)
20年前 毎週末のみの寝屋子が出現	次三男および、島外に出て行く男子でも、希望する者であれば入れる	寝屋子の誰かが結婚するか、25、26歳になる頃
最近 長期休暇のみ、あるいは集まっても寝ない寝屋子が大半	長男でも寝屋子に入ることを希望しない者の出現(寝屋子に入るのが当たり前ではなくなりつつあるようである)	寝屋子の誰も結婚しなくても25、26歳になる頃

性、Aさんの体験に焦点を当て、女性から見て寝屋子とはどのようなものなのかを



- ※1…続柄等はAさん生家基準
- ※2…オレンジ枠内はAさんの生家
- ※3…破線枠内が寝屋子・寝屋親関係
- ※4…青枠は婚姻による親類関係

### Ⅱ 寝屋親になるとは

Aさんはさらに続けて、寝屋子を引き受けたときのことを語ってくれた。

「私が婦人会で子ども運動会の踊りの練習をしていた時に旦那から電話が掛かってきたのが始まりでした。私の子どもは(中学校入学前の)娘三人だから寝屋子に入れるわけでもないし、寝屋子のことは全然考えてはいなかったんです。

ですから、電話があったときからずっとドキドキしていたんです。でも、旦那の方は寝屋を経験しているからか、そんなことはなく、受けようかと父に相談したらいいんです。

寝屋を取る前、一番最初はもう、不安でした。最初は旦那に、無理だと思おうと言ったんです。結局、寝屋を取ることにしたのですが、旦那はどう思っていたでしょうね。私は女だから経験しておらず、寝屋はどういうものかというのわからないので、最初は不安でした。でも、寝屋を取ると決まれば今度は不安がなくなります。

今はまだ遠慮がある分、親子という関係ではないですが、だからといって不安はないです。まだ、お父さん、お母さんと呼ばれていないので、いつそういう段階になるのかというのは楽しみです。誰がいちばん最初に私をお母さんと呼ぶのか楽しみです。寝屋、寝屋親一年生はそんな感じですね

どういった寝屋にしたいかというのは具体的にありませんが、あそここの寝屋はいいと言われるような寝屋、恥ずかしくないような、自分たちの自慢の寝屋にしたいと思っています。それがどういふものかというのは、まだはつきりとはわからないですが、いい寝屋だと言われるようにしたいです。旦那にはどのような寝屋にしたいか具体的なイメージがあるかもしれないですが、私のイメージは、どこにも負けない寝屋にしたいという程度の感じですね。

## 答志島の防災体制における消防団と島の組織の相補性 國分亮太

指導教員 前田 定孝

### I 研究の目的

三重県の特徴として離島が多いことが挙げられる。離島の多い自治体である鳥羽市に注目した。離島には災害弱者である高齢者が多く、有事の際の対応が課題となっている。しかし、鳥羽市には消防署が1署（鳥羽市中心地）のみで、離島には消防署及び消防分署は存在しない。有事の際の対応は、消防団や自主防災組織が担っている。つまり、平時から住民を中心とした防災体制が構築されていることが答志島の特徴である。

だが、2010年に策定された第5次鳥羽市総合計画では、鳥羽市全体の問題として若者世代の人口流出が課題として挙げられている。このことは、答志島にも例外でないと考えられ、今後、消防団員減少への影響が予想される。答志島答志和具地区の人口高齢化率は30・9%（2012年6月）であり、全国平均23・3%（2011年10月）よりも高齢化が進んでいる。つまり、高齢化が進んでいるということは、有事の際に逃げ遅れが考えられる高齢者が要救助者となり、その結果、救助を必要とする人が増えるこ

メージがあるかもしれないですが、私のイメージは、どこにも負けない寝屋にしたいという程度の感じですね。

まだまだ寝屋というものがどういうものなのかわからないですが、私としては、寝屋という制度に関わらせてもらえたことが嬉しいんです。私もよく知ってるわけではないので、関わって、今から知っていくという段階なんです。人生の先輩ではありませんけど、寝屋はほんとに一緒に始まったという感じなので、寝屋の先輩を私も一生懸命追いかけてるようなものです。」

Aさんは、自身の子どもが三人とも娘だったため寝屋に触れるということを考えていなかった。しかし、寝屋を引き受けて欲しいとの申し出を受けてからは、不安だったAさんの心境が、寝屋を受け入れ、楽しみへと変化していく様子、そして、どこにも負けない寝屋を目指そうとしていく様が浮かび上がってくる。

### おわりに

現在答志で生活している答志生まれの男性はそのほとんどが寝屋経験者であるためか、男性の寝屋親は寝屋を組んだときから寝屋らしい意識を持っているようである。一方、女性の寝屋親は直接寝屋を経験したことがないため、寝屋を組んでから徐々に寝屋親になって

とを意味する。一方で、救助にあたる者は人手不足になる。しかし、答志島では高齢化が進んでいるが、消防団員自身の平均年齢は比較的若い傾向にある。そのような傾向から、島民自身の義勇的精神とムラ社会におけるコミュニティが存続していることが推測できる。このような独自の地縁関係が密接な組織を取りあげ、中でも答志島の営みの中心である漁業が防災組織維持の核になっていると考える。

答志島の特徴は、鳥羽市全体と比較して漁業を中心とした一次産業就労者が多いことである。2010年の国政調査では、鳥羽市全体の一次産業就労者は約12%であり、それに対して、答志島では約43%と高い。このことは、答志島は離島という産業発展の条件が限られているため、漁業を中心とした一次産業が島内の有力な産業であることがわかる。一般的に、ペティ＝クラークの法則では、産業構造は一次産業から二次産業、三次産業へと収益性の高い分野へ産業発展していく。地理的な制約条件から、答志島はペティ＝クラークの法則の例外である。

いくのではないだろうか。言うなれば、寝屋親として、寝屋と共に成長していくのである。

寝屋が組まれるとき、そこには寝屋親が存在し、寝屋親は例外なく夫婦である。従来の寝屋研究では寝屋と男性の寝屋親の関係が中心であった。しかし、寝屋親が夫婦という単位である以上、妻の協力は必要不可欠であるため、寝屋子に関して考察する際に女性の視点をおさなりにするべきではないだろう。

人文社会科学研究所地域文化論専攻 家族社会学

### 参考文献

- [1] 新川泰弘・島崎良、2009、「答志島の寝屋制度と子育て支援環境―子育てサロン利用者へのインタビュー調査を通して―」、『三重大学地域社会研究所報』21、pp.127-137
- [2] 伊藤ひとみ、「支えあいが息づく」答志島 寝屋子朋輩の島」、『女性自身』No.1986、pp.59-66
- [3] 川又俊則、2012、「答志の寝屋制度と「放課後」、鈴鹿短期大学生活コミュニケーション学研究所年報、『生活コミュニケーション学』3、別冊
- [4] 広報とは、1999、「特集 寝屋子物語 寝屋子は夜8時を過ぎると輝きを増す」、『広報』No.975、pp.1-9
- [5] 松竹維、2012、「答志島の「寝屋子制度」、『伊勢新聞』、7月29日、p.6
- [6] 松浦勲・大村恵子、2002、「日本最後の若者宿―鳥羽市答志の寝屋子の

しかし、その産業発展の制約が、漁業を中心として地域に根付いた経済活動を行える基礎を作っている。そして、その営みが地域の雇用を創出し維持している。さらに、その雇用の中心である漁業を生活として生きている人々が、互助組織である漁業協同組合（以下漁協）を結成している。漁協は、近代以前に浜の管理を行った漁業集落を基盤として設立された漁業組合を前身としている。漁協は生産のコミュニティであり、生活のコミュニティでもある。島民の生活を語る上で、島民の生

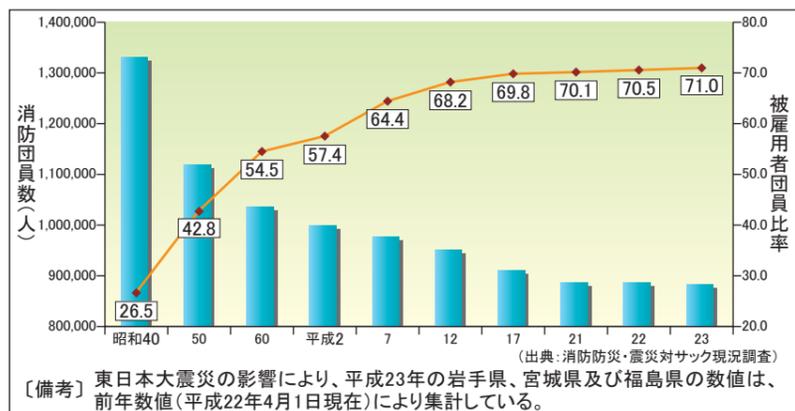


図1：消防団員数と被雇用者団員数の推移

- [7] 宮前耕史、1999、「現代における宿親―宿子関係―鳥羽市答志の寝屋慣行を事例として」、『史境』38、39、pp.92-101
- [8] 宮前耕史、2001、「寝屋における人間関係と「古い」答志町答志の事例から」、『国立歴史民俗博物館研究報告』91、国立歴史民俗博物館、pp.379-383
- [9] 宮前耕史、2002、「寝屋制度」の誕生―序説―「寝屋制度」について（寝屋親会議の記録）―答志―より、『日本文化研究』14、pp.19-51
- [10] 宮前耕史、2004、「寝屋制度」の「現在」―記述のための覚え書き―答志島・答志の寝屋慣行をめぐる「民族再帰的状況」によせて―、『日本文化研究』15、pp.43-81
- [11] 宮前耕史、2005、「民族に関する言説の内面化―答志島・答志の寝屋慣行をめぐる「民族再帰的状況」と言説としての「寝屋制度」―、『日本文化研究』16、pp.17-56
- [12] 宮前耕史、2006、「マス・メディアにおける答志島・答志の寝屋慣行に関する理解の特徴―新聞・雑誌記事を中心とした検討から―」、『歴史人類』34、pp.94-124
- [13] 山岡健、1995、「若者組」「三重県鳥羽市坂手島・答志島・神島」、『大阪教育大学教育研究所報』30、pp.1-9
- [14] 横濱勇樹・上野利三、2009、「三重県鳥羽市の「寝屋子」にみる持続可能なコミュニティ形成に関する研究」、『三重大学地域社会研究所報』21、pp.107-125

活と切っても切れない関係である漁協が、地縁を強くし、家族的な要素を強めていくことが考えられる。地域コミュニティを「都市型」と「農村型（漁村型）」と分類するのであれば、島内のコミュニティは、閉鎖的ではあるが、情緒的な「農村型（漁村型）」のコミュニティである。つまり、都市に比べ外部との関係が少ないが、それが自分たちのまちは自分たちで守るという義勇的な精神につながっている。そうした意識は、全国的に比べて大きな違いであり、答志島の特徴とも言える。漁業が雇用を生み出し、互助組織である漁協が基礎構造となっている。本論文では、全国の消防団の現状と答志島の消防団を比較し、消防団を支える漁業協同組合などの島の各コミュニティおよび各防災組が相補性を持っていることを証明していきたい。

### II 消防団の課題（消防団員の減少について）

#### 全国的に消防団が減少している原因

① 消防団減少の原因として、消防分署の配置による消防職員の増加や消防設備の拡充が行われており、常備消防の整備が進んでいる。常備消防が充実するにつれて、市民は消防団が必要ないと思われ、消防団の重要性が希薄になるというパラドックスが起きている。

② 地縁社会の崩壊によって、消防団入団への機会が減り、消防団の魅力や必要

性の伝達ができなくなっている。新興住宅では、住民は地域活動になじみが薄く、消防団の存在を知らない人も少なくない。  
 ③ 農業から工業へと産業の高度化が進み、向都離村が進んだ。かつて消防団員は、漁業や農家、商店主など地元で職を持つていた人が多かった。しかし、自営業者が減って被雇用者が増えたため、勤務地が地元の地域に限らないため、災害現場への集合に時間を要するといった問題が出てくる。(図1)

### III 答志島(答志町)の消防団

鳥羽市では、1954年に鳥羽市消防団が発足した<sup>4)</sup>。当時の団員数は725名と、現在の500名より大規模な組織であった。その理由として、当時は、常備消防がなく、消防団だけで地域の災害に対応していたため、団員数が多かったことが考えられる。その後、鳥羽市消防本部は昭和38年に設置された。また、答志分団の条例定員数は70名で、分団長1名、副分団長1名、部長4名、班長12名、団員52名で運営されている。鳥羽市条例定数は、常備消防の職員が増員されるたびに、団員数が削減されてきた一方で、答志分団の団員数は維持され続けてきた。その理由は、島内には消防署がないため、島の災害に関して多くの部分を消防団に任せているためである。

現在、答志分団の団員数は65名(2012年9月時点)で、その内の約8

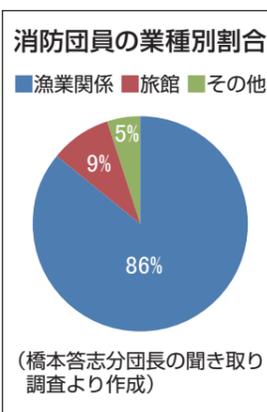


図2：消防団員の業種別割合

割強の団員が漁業関係者である(図2)。前述のとおり、全国の消防団員数は減少傾向にあるが、答志島では漁業を中心とした地域に根付いた経済活動を行っているため、団員数の確保に繋がっている。また、答志分団の団員は、比較的年齢が若いことも特徴である。全国の消防団員の平均年齢は約39・1歳(2011年時点)であるが、答志分団の平均年齢は約34歳(2012年9月時点)である。全国の消防団員の高齢化は、悩ましい問題である。その原因としては、前述のとおり常備消防の充実(消防署・職員数の増加)、地縁社会の崩壊、被雇用者数の増加などの理由から若者の新規入団が減少しているため、既存の入団者が退団できずに、団員の平均年齢が上昇している。答志島では、かつて日本全体でみられたように、消防団員の活発な新旧の人員交代が行われており、現在でも新入団員の継続的な確保が行われている。

### IV 今後の課題

島民自身が、漁協や青年団などの組織に加入し、行事に積極的に参加している

## 鳥羽市におけるエコツーリズムと地域経済

長谷川 栄里

指導教員 豊福 裕二

### はじめに

鳥羽は観光と漁業のまちである。日本有数のリアス式海岸が織りなす景色や、そこで育まれる豊富な水産資源、伝統的な海女漁や真珠養殖の歴史などの観光資源は、毎年多くの観光客に親しまれている。しかし、鳥羽水族館などの大型観光施設は鳥羽駅周辺に集中し、他の多くの観光資源はまだ観光対象として十分認識されていない。また、観光業の利益と地域の基幹産業である漁業の利益が必ずしも連動しているわけではなく、本来鳥羽の魅力の源を生み出しているはずの海では、漁業従業者の減少、加速する高齢化、漁獲量の減少などの問題が生じ始めている。

これらの地域の課題に対して鳥羽市が取り組んでいるのが、「エコツーリズム」という新しい観光の仕組みづくりである。本稿では、伊勢志摩地方を中心としたエコツアー運営事業体である「海島遊民くらぶ」の取り組みから、エコツーリズムが鳥羽の地域経済においてどのような影響を与える可能性があるのかを考えていきたい。

### ① エコツーリズムとは

エコツーリズムの考え方は、1970

年代までに世界各地で行われた観光開発の負の側面が表面化し問題となった際に登場した。アフリカでは野生動物の乱獲や、大量の人間が移動することによる自然への負担が問題となった後、一転して「人を排除して保護する」ことに傾いたが、それは地域住民の生活を無視したものであり、継続可能性に欠けていた。そこで、自然環境を守るためには、人を寄せ付けずに保護するのではなく、観光資源として適切に管理しながら活用することの必要性が叫ばれた。その地域で生活する地域住民に利益を還元することで、地域経済の発展と環境の保護を両立させるという可能性が見出されたのである。

日本においては、エコツーリズムは1990年前後に本格的に取り入れられ90年代の後半から全国的に拡大した。リゾートの乱立などに加え、過疎化や少子高齢化に伴って自然環境を守る担い手は不足する一方であり、地域環境の悪化が地方で顕在化しているなかで、「地域づくり」の視点から持続可能な観光・まちおこしのあり方としてエコツーリズムに可能性を見出す流れとなったのである。

から、顔の見える繋がりが維持でき、防災体制が構築されていることが答志島の特徴である。このように、島内での防災体制は、陸地よりも確実に組織間の連携が保たれており、全ての取組みを導入することは現実的に不可能な部分もあるが見習うべき点は多い。だが、答志島の消防団にも、表面化していない課題がある。

それは、消防団員の多くは島内の漁業関係者であるが、それ以外の職業の人は消防団員に参加していない。陸地の消防団員は遠方に職場を持つ人でも消防団に入団しない傾向にあるが、そのことと同様に島民で島外に職場を持つ会社員は消防団へ入団していない。遠方に職場を持つ人が消防団に入団しない問題は、本土では取り上げられることがあるが、答志島の消防団員数は充実しているため、島内では問題として取り上げられることがない。しかし、このことは陸地と漁村の共通の問題である。こうした潜在的な問題は、今後の課題として考える必要がある。答志島の島外に職場を持つ会社員が、消防団に入団してもらおうことで、今後予想される消防団の規模縮小は防ぐことができる。そうした、潜在的な可能性を持った団員候補に、消防団入団を促すことが課題である。

次に、島の若者の流出をどう食い止めるかが課題である。島の魅力を若者に伝え、若者の流出やイーターナーを増やせば、

### ② 鳥羽市におけるエコツーリズム

鳥羽市では、もともと民間事業者の個別的な取り組みが盛んであったが、「鳥羽市観光基本計画(2008年)」「第5次鳥羽市総合計画」のなかで改めてエコツーリズムを推進していくことを明確に位置づけた。また、自然体験ツアーなどを行っていた事業所などを中心に、鳥羽市としての意思の共有・事業者同士の連携、さらには他産業の事業者との連携を促進する場として鳥羽市エコツーリズム推進協議会が設立された。

鳥羽市におけるエコツーリズムは、観光を中心に、さまざまな事業者・市民・行政が連携し、地域に利益を還元させる「地域内の経済循環」に視点をおいたもの

参加者数	ツアー料金	ツアー外の消費	全消費額
1,379	2,408,300	1,419,914	3,828,214

(単位:人、円)

1人あたり全消費額		【ツアー外消費】
ツアー料金	ツアー外消費	
1,746.41	1,029.67	●鳥羽産の水産物加工品の購入 ●酒屋・おみやげものの購入 ●食事など

(集計期間:2011年2月6日~2012年7月2日)  
(出所:海島遊民くらぶへのヒアリング調査資料より作成)

図1：つまみ食いツアーによる経済効果

島の組織は安定した状態が続くはずである。つまり、「防災体制づくり」と「まちづくり」は全く関係性のないように思えるが、実は密接な繋がりがあある。人が住んでいるから、人々の営みができ、コミュニティが発生することは、当然のことであるが、人が村に住まなくなるとは、営みやコミュニティは維持されない。また、島に若者がいなくなった場合、島を簡単に離れることができない高齢者は、災害時に誰にも助けを求めることができない。こうした事態を防ぐには、村の活性化、「まちづくり」があつて、はじめて村の組織循環が維持できる。一般論ではあるが、島の主な雇用先である漁業の魅力をどのように伝え、また、ブランド化などを行って外部に発信していくかが今後の課題となってくる。そして、その課題を解決すれば、現在の島の組織は維持される。

(こくぶりよつた)

人文社会科学研究所 社会科学専攻 地域行政政策専修

### 参考資料

- [1]鳥羽市役所(編)『第5次鳥羽市総合計画』2010年10月、pp8~9
- [2]広井良典『コミュニティを問う』すくま新書、2009年、pp11~18
- [3]後藤一蔵『国民の財産 消防団』近代消防社、2010年、pp39~50
- [4]鳥羽市消防本部『消防のあゆみ』平成23年版 消防年報、2012年

である。エコツーリズム推進協議会はまだ設立されてまもないが、「循環」と「連携」をテーマに事業者同士の連携のあり方や課題の共有を進めている。

2001年に設立された海島遊民くらぶは、離島を中心に素朴な漁村と自然のつながりをテーマに地域貢献度の高いビジネスモデルとして日本型エコツーリズムを推進している事業体のひとつである。スタッフは伊勢志摩地方在住の20代~30代の女性5名が中心となり、ガイドとしてツアー参加者に鳥羽の魅力を伝えていく。エコツアーを行うにあたり、自然環境への負荷を抑えるため、海岸からの貝や石の持ち帰りの制限や、生物と接する際の自主ルールを設けている。さらに、島の漁師の生活に土足で踏込んだりしないような工夫をすることで、漁協や地域住民からの理解と協力を得ながら、エコツーリズムが孕む「環境への負荷の増大」という問題をクリアし、持続可能なツアーを作り出していると言える。

海島遊民くらぶの事業の大きな特徴として挙げられるのが、環境問題に止まらず、地元への利益の還元を大切に、地元の産業の活性化を意識しているところである。次に、この「地元への利益還元」について、より詳しく見ていくことにしたい。

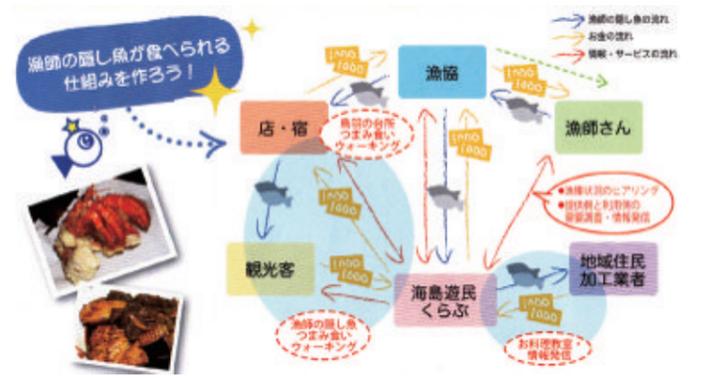
### ③ エコツアーによる地域への利益還元とは

図1は、海島遊民くらぶが「鳥羽の台

所つまみ食いウォーキング」「漁師の隠し魚つまみ食いウォーキング」の参加者に対し、ツアー以外での消費額を調査した結果である。「つまみ食いウォーキング」とは、参加者がガイドと共に鳥羽のまちを歩き、協力している水産加工品店や料理店を訪ね、「つまみ食い」をするように鳥羽の魚介類を味わうというツアー商品である。一人あたりの消費額としては決して大きくはないが、ガイドや水産物加工品店の店主が商品に関する情報を観光客に提供することもツアーの内容の一つであるため、「ただ商品売る」こと比べてより多くの付加価値を生み出すことを可能にしていると言える。

さらに、ツアーを通じて地元の商品を紹介し、販売機会を増大させることに寄与しているのが、「隠し魚つまみ食いウォーキング」である。「隠し魚」は、規格外のものや魚価の調整のために市場では取引されず、通常は廃棄されるか、漁師の家庭で自家消費されるような未利用魚のことであり、時には漁獲量の半分を占めることもあるという。これらの未利用魚を「隠し魚」として、地域の飲食店や水産加工品店に調理してもらい、それらを食べ歩くのがツアーの主旨であり、ツアーを提供し始めてから1年間で約120名の参加者数となっている。

この事業の発端は、エコツーリズム協議会の場で、漁業者からの問題提起として



(出所：環境省(2012)「未利用魚から漁師の隠し魚へ」パンフレットより)  
■ 図2：隠し魚による経済効果

て未利用魚の問題が挙げられ、これを漁業だけで解決するのは困難であり、観光業などを含めた課題解決の方法として取り組まれたことにある。一般家庭の食卓に流通している品種は水揚げされる品種のごく一部であり、長い年月をかけて生態系に負担をかけることになる。未利用魚の流通を推進することで、これらの負担を分散することにつながる。流通体制は整備されているわけではないが、鮮度の高い地元のみでの提供となっていないことが逆に「ここでしか食べられない」というプレミアムを作り出すことにもなる。現在「隠し魚つまみ食いウォーキング」に協力している店舗は6店舗あり、仕入

などには漁協も協力体制を取っている。市場に回収していないものを商品化するとき、その商品の価値や魅力が消費者にわかりにくく、価値を見出せないという問題がある。むしろ、その商品にアクセスする機会さえ持たない場合が多い。その中で、つまみ食いウォーキングは消費を「ツアー」という観光のアトラクションの一つのように捉え、そこに組み込まれたものとして商品へアクセスする機会を設け、さらに観光客にわかりやすく魅力を伝えることによってこうした課題を解決しようとしているのである。

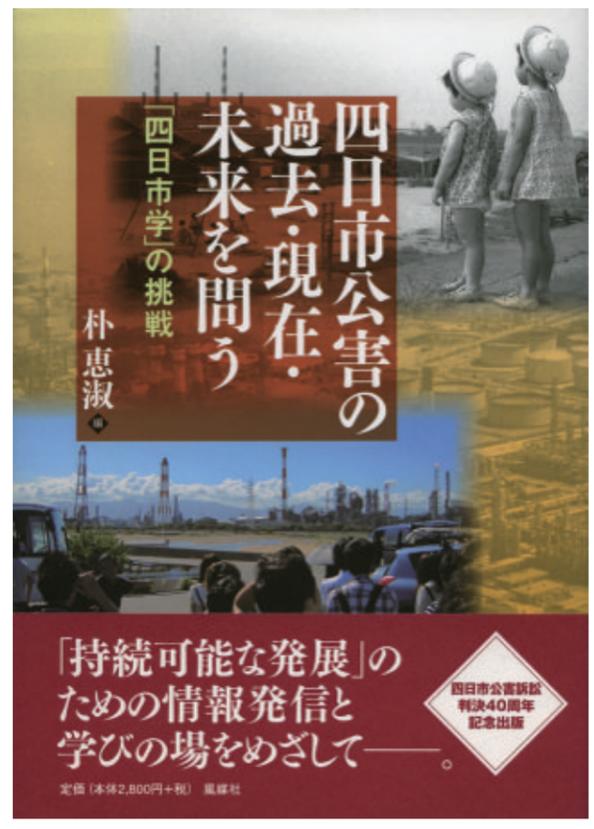
また、このような仕組みが浸透するにつれ、観光が地域に与える影響はますます大きいものとなっていくと考えられる。「観光施設」ではなく「地域」が観光資源になっているということは、そこに住民も観光業に自然と携わっているとも言える。今後は、地域の良さだけでなく課題についても住民が主体的に意見を出せるような仕組みづくりも、求められてくるだろう。

「大型リゾート施設」や「大型観光施設」による観光は、地域間の差別化が難しく、画一的な観光地が量産されがちであるが、もともとその地域に存在する自然や文化は、その地域にしかない代替不可能な観光資源であると同時に、人々の生活の基盤となっているものである。それを観光資源とするエコツアーを中心とした「エコツーリズム」は、観光客の流れを観光施設内のみで留めず、地域の自然環境や文化と密接に結び付いた一次産業や、地域に根差した二次産業にも利益が流れ、地域内での経済循環を作り出すような仕組みづくりと言える。

しかし、エコツーリズムはあくまでも「考え方」や「仕組み」であり、それぞれの事業者の主体的な取り組みがあつて初めて成り立つものである。「隠し魚」の事業にも、流通の問題、消費者の魚食離れ、協力店舗の新規開拓、参加者数の拡大などの個別の課題があるが、一事業者で解決するには困難な点も多い。協議会を地域のシンクタンクとして積極的に位置づけ、今後より活発で継続的な連携のありかたを進めていくことが望まれる。協議会では観光業者だけではなく漁業・林業とも連携していく場が作られているが、まず「エコツーリズム」の考えが鳥羽市で観光業に就いている人々の間に浸透することが望まれる。

人文社会科学研究所社会科学専攻 産業経済論  
 参考資料  
 ・小林寛子(2002)『エコツーリズムってなに?』河出書房新社  
 ・環境省(2012)「未利用魚から漁師の隠し魚へ」

# 新刊自著を語る



## 四日市公害の過去・現在・未来を問う「四日市学」の挑戦

風媒社 2012年発行  
 三重大学理事・副学長、人文学部教授 朴 恵淑  
 環境地理学・環境教育

おり、本書は教科書となりません。また、2014年10月に愛知・名古屋で開催される、国連ユネスコ主催の「持続発展教育(ESD)の10年」においては、四日市(三重)からアジアへ、世界へ通用できるグローバル環境人材の育成を目指しています。四日市公害から学ぶ「四日市学」は、ここで中心的な役割を担うこととなります。

このような背景のもと、本書は次の6つの内容から構成されています。

第1章は、「環境正義」の社会的条件とはというテーマで、憲法、環境法、行政法、民法等の法的側面から四日市公害の本質について論じています。第2章は、「公害」と「環境問題」をつなぐテーマで、国際環境の動向、日韓のコンピナート周辺児童の健康被害の比較について論じています。第3章は、生態系の復元を図るテーマで、伊勢湾沿岸の気象と地下水や海水との大気―水環境、伊勢湾や英虞湾の海洋生態系の復元について論じて



■ 四日市コンピナート全景 1968年7月25日 (写真提供：澤井与志郎氏)

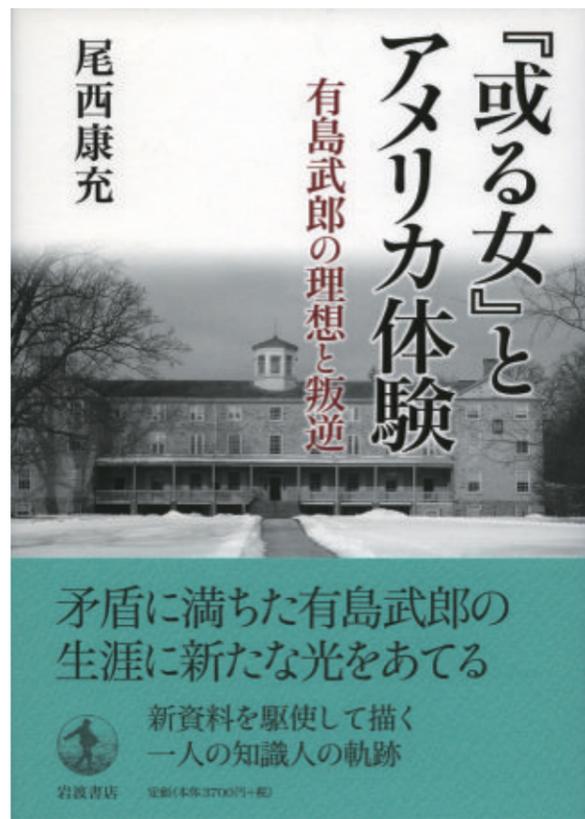
昨年、1972年7月24日の四日市公害訴訟の判決から40周年目となる記念すべき年にあたります。高度経済成長期の1970年代の基礎となった1960年代の経済優先の価値観から環境が破壊され、命が守られなかった四日市公害の教訓から学ぶ、『四日市公害の過去・現在・未来を問う——「四日市学」の挑戦』を出版しました。

世界一の環境先進大学を掲げる三重大学において、四日市公害の発生要因、影響、対策について、法律、経済、社会

地理学的分野など人文社会科学、大気環境や水環境など理工学的自然科学、公衆衛生学分野の医学などを網羅する「四日市学」研究会を2001年4月に立ち上げ、毎年国際環境シンポジウム「四日市学」を開催しており、本書は4冊目となります。また、四日市公害から学ぶ「四日市学」を2004年4月から共通教育において開講し、大学の教員だけでなく、四日市ぜんそくの認定患者や語り部、企業、行政、NPOなど社会の各セクターからの講師がそれぞれの立場から教えて

ます。第4章は、「グリーン産業」の可能性を探るテーマで、環境配慮型ものづくり、韓国のグリーン産業戦略について論じています。第5章は、みんなが創る「持続発展教育」のテーマで、四日市公害と持続発展教育(ESD)、災害と防災教育について論じています。最後に、第6章は、四日市公害とモンゴルの環境問題をテーマとし、四日市公害の写真記録、モンゴルのホンゴル村における四大公害の複合型の公害・環境問題について、村長や被害者へのインタビューを基にした記述や写真を掲載しています。

本書が、四日市公害訴訟判決40周年を記念して出版されたことから、四日市公害を過去の負の遺産から未来の正の資産へ捉え直す有効なツールとなることを期待しています。



## 『或る女』と アメリカ体験 有島武郎の理想と叛逆

尾西 康充  
岩波書店 2012年発行  
人文学部教授  
日本近代文学

島が一九〇三年（明治36）八月二五日に横浜港を出港して、〇六年九月一日にイタリアに向けてニューヨークを出港するまでの約三年間にわたるアメリカ留学であった。ちょうど日露戦争の期間と重なって、〇五年五月には日刊紙「サンフランシスコ・クロニクル」第一面に「日

本人の侵略―現代の問題」が掲載されて排日運動がはじまっていた。アメリカ留学時代の有島は、学業のかたわら、フィラデルフィアでは精神病院に看護師として勤務し、ボストンでは農場でポーランド系移民労働者たちとともに働き、ワシントンDCでは議会図書館で浮世絵コレクションの整理とカタログの刊行に当たった。父の武や信仰の師内村鑑三が持っていた家長的な権威、そして札幌農学校時代の級友森本厚吉との間で続いていた同性愛は、有島に深刻な「自己否定」のモメントを与えていた。だがアメリカでの労働体験が示しているものは、有島における「自己否定」の衝動が次第に、自我を圧迫する権威への否定に転化し、

大正の白樺派を代表する有島武郎は、『芸術と生活』『政治と文学』などの問題を考える際には、見落とすことのできない作家である。港湾労働者を描いた「かんとく虫」や、北海道の小作人を描いた「カインの末裔」、そして「新しい女」早月葉子を主人公にした「或る女」などは、社会的問題をテーマにした昭和のプロレタリア文学に繋がる作品である。

蝦夷富士と呼ばれる羊蹄山の麓、北海道虻田郡狩太（現ニセコ町）に約四百町歩の農場を有していた有島には一九一五年（大正4）当時、小作料等で年間六千円をこえる収入があった。破格の高給で専属作家として朝日新聞社に迎えられた夏目漱石の月俸が二百円であったことを考えれば、いかに恵

まれた生活を保証されていたのかが分かる。しかし二二年七月一八日、有島は小作人たちを前にして農場の無償譲渡を発表する。あまりに突然の宣言に「農民達はや、不思議な面持ち」で耳を傾けたという。「理想」と「叛逆」――この二つの言葉は、有島の文学を端的に表現するのにふさわしい。

昨今の有島研究は、テクスト論やジェンダー論などの方法が使われて、作品が読み解かれることが多い。説得力に富むそれら先行研究をふまえながらも、私は、生き急いでいたともいえるほど、ひたすら「理想」を追い求め、既成の権威に「叛逆」しようとした有島の生き方の根底に、激しい「自己否定」があったことを実感しようと考えた。私が注目したのは、有



## 環境法講義

高橋信隆（編著）・岩崎恭彦・小澤久仁男『環境法講義』  
信山社 2012年発行

岩崎 恭彦  
人文学部 准教授  
地方自治論・環境法

てくれた受講生に、この場を借りてお礼を言いたい。

講義用テキストとしての性格から、本書では、講義を受講する学生にとつての便宜をいろいろと図っている。たとえば、各章・各講の冒頭にあらかじめ学習のポイントやキーワードを示したり、コラムや資料を随所に配置するなど、読み進めやすさや親しみやすさを重視した諸々の工夫を凝らしている。内容面では、総論と各論の二部構成とすることにより、ある明確な「もの見方」に基づき、さまざまな環境問題を法的に考えるための道筋を示すようにした。すなわち、まず、総論においては、公害・環境法の歴史的發展経緯を概観する「公害対策から環境管理へ」（第一章）、環境関連の法律や制度を貫く環境法の基本原則や環境権などの諸論点を扱う「環境法の基礎」（第二章）、更には、「環境保全の手法」（第三章）、「環境リスクへの法的対応」（第四章）、「地方分権時代の環境法」（第五章）といった各章を通じて、環境問題を法的に考えるに際しての「もの見方」を提示している。その上で、各

論では、わが国の環境法において今日なお中心的地位を占める「公害規制の法理と制度」（第六章）と、近年発展の目覚ましい「廃棄物・リサイクル法」（第七章）および「自然保護法」（第八章）という主要な環境問題の領域を取り上げつつ、ここでは、環境法特有の「もの見方」がいかにして個々の具体的な法律や制度に反映されているかを示すよう心がけた。環境問題の現象や環境関連の法律・制度を「知る」だけではなく、受講者が環境法のあるべき将来像を「自ら考える」ようになつてほしいというのが、執筆者の共通の願いである。そのため確かな視点を養えるような講義になるように、私も努力したい。

三重大学人文学部に赴任して早いもので約九年がたち、この四月には、一〇年目という節目の年度を迎える。大学院での研究生活に区切りをつけて、新たに研究・教育の拠点を三重に構えた当初は、今後の研究の方向性を模索しつつ、毎週目前に迫ってくる講義や演習の準備をすることに精一杯で、この地で生活し始めたことの意味を考える余裕などなかったように思う。ただ、一つの節目を前にして思うのは、三重という地で研究・教育の場を与えていただいた良縁に、やはり自覚的でありたいということ。とりわけ、大学院の頃より環境行政のあり方に関心を持ち、環境法の研究を続けてきた私である。かつては深刻な公害に直面し、公害問題に向

き合い続けてきた歴史的経験から、近年では環境先進県を標榜するなど環境政策に積極的に力を注ぎつつある三重に暮らす、この地の大学に籍を置いていることを、研究者として教育者としての自分の生き方へのなかにしっかりと位置づけて、自分が追いかけるのか、何をすべきなのかを追求していきたくて考えているところである。

さて、本書「環境法講義」は、大学における環境法の講義用テキストとして出版されたものである。そして、本書の内容は、各執筆者がそれぞれ実際に使用している講義ノートを基本としている。私自身も、人文学部法律経済学科の専門科目である環境法の講義を担当しており、そこでの教育実践を基に今回の出版企画に参加させていただいた。各年度の講義を通して多くの有益な質問や意見を寄せ

てくれた受講生に、この場を借りてお礼を言いたい。

講義用テキストとしての性格から、本書では、講義を受講する学生にとつての便宜をいろいろと図っている。たとえば、各章・各講の冒頭にあらかじめ学習のポイントやキーワードを示したり、コラムや資料を随所に配置するなど、読み進めやすさや親しみやすさを重視した諸々の工夫を凝らしている。内容面では、総論と各論の二部構成とすることにより、ある明確な「もの見方」に基づき、さまざまな環境問題を法的に考えるための道筋を示すようにした。すなわち、まず、総論においては、公害・環境法の歴史的發展経緯を概観する「公害対策から環境管理へ」（第一章）、環境関連の法律や制度を貫く環境法の基本原則や環境権などの諸論点を扱う「環境法の基礎」（第二章）、更には、「環境保全の手法」（第三章）、「環境リスクへの法的対応」（第四章）、「地方分権時代の環境法」（第五章）といった各章を通じて、環境問題を法的に考えるに際しての「もの見方」を提示している。その上で、各

自己変革ではなく社会変革、しかも出版物を通じて社会を導く作家を志すようになったことである。私は有島が滞在していたアメリカ東海岸の各都市を丹念に調査し、新発見ともいえる資料を収集することによって、作家的出発にたどり着くまでの有島の成長を裏付ける手がかりを得ることができた。

原稿用紙に換算して九六〇枚を書き上げたのだが、残念ながら編集部によってその半分に減らされることを命じられた。一点一画をおろそかにしないように精魂を込めて再編集した。有島が軽井沢で自殺したのは四五歳、ちょうど今の私と同年齢で、有島の生涯を追いながら自分も有島を生きようと思った。

取材に際して訪れたアメリカの都市は、長引くイラク戦争の影響が色濃く、PTSDを病む復員兵を支援するミーティングや反戦運動の集会などがみられた。その一方、有島農場があったニセコ町は、現在、香港やオーストラリアの外資系企業がリゾート地を開発するため土地を買収し、投機熱に浮かされている。有島が生きていれば、どのように感じただろうか――民族や国家間の差別や暴力、あるいは富の偏在など有島が直面していた問題は解決されなまま、わたし達の前に今もなお立ちはだかっているのである。

（おにしやすみつ）

# 三重の歴史と風景

## 四日市公害訴訟判決 40周年の節目に

朴恵淑

三重大学は、県内唯一の総合大学であり、四日市公害から学ぶ「四日市学」を創ることにより、四日市（日本）からアジアへ、世界へ通用できるグローバル環境人財を育成しています。このような実践的環境教育は、2014年10月に国連ユネスコ主催によって愛知・名古屋で開催予定の「持続発展教育（ESD）の10年」の総括において、世界へ発信できる

有効なツールとなります。

2011年の3月11日に発生した東日本大震災は、世界最大級で千年に一回の確率の災害となり、日本社会に甚大な影響を及ぼしました。巨大津波による被害だけでなく、福島原子力発電所事故に伴う放射性物質による被害は、過信による安全神話はもろくも崩壊することを、私たちに分かった人災でありました。



■ 四日市公害訴訟原告9人 1968年6月25日 (写真提供：澤井与志郎氏)

1870年代の足尾銅山の公害事件に端を発し、1960年代の水俣病、イタイイタイ病、新潟水俣病、四日市ぜんそくの四大公害を経験しながら、2011年の福島原発問題が後を絶たず起きることは共通の要因があります。科学技術への過信、国策と企業の利益追求優先、社会的に弱い立

場の住民を守る意識の稀薄さなどが挙げられることから、環境正義に基づいた価値観の確立や持続可能な環境を創ることが求められています。足尾銅山鉱毒事件を告発、追及した田中正造の「真の文明は山を荒らさず川を荒らさず村を破らざるを殺さざるべし」という言葉を真摯に受け止める時期に来ていることを自覚すべきです。

一方、東日本大震災によって、埋め立て地の臨海部に立地する石油コンビナートにおいて、液状化、石油タンクの炎上やガス・石油の漏洩などが発生したことから、四日市コンビナートにおいてもその防止策が急務となります。しかし、事業者からコンビナートの詳細な資料の開示が得られにくいことや、莫大な経費がかかることから、防災策が進んでいないのが現状であります。特に、四日市コンビナートにおいて、東海・東南海・南海の3連動地震が発生する場合、東日本大震災に匹敵する被害が想定されています。四日市コンビナートは、ソフト及びハード面での莫大な経費問題の難題を抱えな



■ 四日市公害訴訟判決日 1972年7月24日 (写真提供：澤井与志郎氏)

がらも、事業者と行政との連携による防災対策に真剣に取り組むことが必要不可欠となります。

四大公害の発生地において、四日市公害資料館だけがまだ建設されていないまま、四日市公害訴訟の判決から40年が過ぎています。四日市ぜんそくのような公害が二度と繰り返されないためにも、発生メカニズム、生き物への影響、命の尊厳、公害の教訓を活かすための環境教育、環境意識の向上、有効な環境政策、市民ガバナンス、企業の社会的責任、国

際環境協力などについてきちんと伝えることは大変重要な意味を持ちます。四日市公害資料館は、貴重な記録の保存や利活用の可視化の場であると同時に、語り部の活動の場となります。また、四日市市のみならず、世界において経済成長の著しい新興国や発展途上国が同じ過ちを犯さないためにも必要不可欠な情報発信の拠点や学びの場となります。2014年度中に開館を目指している四日市公害資料館は、次のような役割と機能が期待されます。(1) 市民・企業・行政が三位一体の連携を図る市民主導の資料館であること、(2) 四日市公害を学び、発信し、世界一の環境都市形成に役立つ資料館であること、(3) 国際環境協力のメッカとなるべく常に成長する

資料館であること。

四日市公害の記録や関係者の証言は、大変重要な資料となります。四日市ぜんそくの認定患者であり、四日市公害訴訟の原告9人のうち、唯一の生存者である野田之一さんは、「四日市市は、四日市コンビナートの誘致によって結局は損した。四日市公害が克服された時には言うを言いたい、私の生きる間には言えないのだろう」と残念がります。四日市公害裁判を担当した3人の裁判官のうち、唯一の生存者である仙台在住の後藤一男元裁判官は、「正直、四日市公害訴訟が一番で確定されるとは思えなく、あの裁判は最高裁までいくと思った。そのためにもしっかりと判決文を書かなければという信念があった。当時、私には3歳と5歳の子供がいて、これ以上汚れた環境を残したくないといった思いがあった」と振り返っています。四日市公害の被害を直接受け、生涯を通じてそれに係った人たちだからこそ、人の心を動かす実在の確かな表現ができ、同時に、倫理観や信念に満ちた選択が後世にどのような影響を及ぼすのかを感じさせてくれます。



■ 「四日市公害から学ぶ四日市学」授業 (三重大学共通教育) 2011年7月17日 (写真提供：著者)

韓国、中国、モンゴルなど東アジア諸国において公害・環境問題は大変深刻であります。韓国は、1970年代に石油化学工業を基盤とする国家産業団地を臨海部のウルサン、温山、麗水(川)に建



■ 四日市公害訴訟判決40周年記念「国際環境シンポジウム四日市学」 (三重大学環境・情報科学館) 2012年7月21日 (写真提供：著者)

設したことから、1980年代に「温山病」に代表される、日本の四大公害の複合型の公害が発生しています。四日市コンビナート周辺の約1000名の小学生と韓国のウルサン、温山、麗水(川)国家産業団地周辺の約2000名の小学生を対象とした、居住地域とぜんそくとの相関関係を調べた2003年の私の研究によると、現在、両国共に工業団地周辺の児童の約30%がぜんそくの症状を示しています。中国の工場地域での大気汚染、重金属による土壌汚染や地下水汚染は非常に深刻で、特に、湖南省、遼寧省、吉林省、内モンゴル自治区などに顕著に現れています。モンゴルの首都ウランバートル周辺の大気汚染、土壌汚染、地下水汚染は大変深刻で、ウランバートルの中心を

流れるツル川は、工業用水や生活排水などの影響によって重金属の値が非常に高く、例えば、亜鉛は日本の水道法で定められている値の2〜7倍以上の値を示す場所が多くみられます。また、ウランバートル市から北に約200km離れたホンゴル村において、金の精錬や化学工場からの排水によって、国際基準の約13〜65倍を超えるシアン濃度の飲料水や、約3〜3700倍を超える排水のシアンの有機水銀汚染によって、四大公害の複合型の人体への深刻な被害が生じています。

環境の世紀と言われる21世紀に入ってもアジアの隣国で発生している公害・環境問題の解決のためにも、四日市公害訴訟判決40周年となるいまこそが、四日市公害の過去・現在・未来を問うターニングポイントとなります。特に、四日市公害から学ぶ四日市学において、命の尊厳、法の遵守、経済と環境の持続的発展をはかる環境経済、企業倫理、環境教育、市民ガバナンス、地域共同体、国際環境協力など、多岐に渡る諸問題への認識を深め、実践していく上で、人文社会学の果たす役割が最も重要であることから、人文学部の特徴を活かした今後の取組に大きな期待が寄せられています。

(ぼくけいしゅく)

三重大学理事・副学長 人文学部教授  
環境地理学・環境教育

# 試行錯誤は続く ～教育者としてのスタート～

和田康紀

「学生との双方向のやりとり、学生の興味を引き付ける方法・・・これは、難しいですね。ポイントは、他の先生もマイケル・サンデルのようなすごい授業をしているわけではないので、あまり、深く考えすぎないことかもしれませんね。」

これは、私が厚生労働省から三重大学人文学部に赴任する直前の昨年3月、講義の奥義について前任の稲川先生に尋ねた際にいただいた言葉である。

そう、テレビで見たマイケル・サンデル教授の講義は、目からうろこが落ちるようなインパクトがあった。教育者としてあんな講義ができれば理想的だと思っ。

しかし、私の4月からの「社会保障論」(前期)、10月からの「福祉経済論」

になっているのか、対応策として何が考えられるかをできるだけ丁寧に説明した上で、稲川先生の手法を踏襲し、講義の最後に15分ほど時間を取って、コミュニケーションペーパーなるものを書かせて、提出させることにした。講義の感想を書いてもらうだけでは学びにつながらないので、何らかの質問

(後期)の講義はそんなレベルには程遠い。毎日が試行錯誤の連続である。

そもそも私が大学生だったのは20年以上前になるが、当時の先生はどういう講義をしたのだろうか。当時、私は一橋大学の法学部に在籍したが、法律科目だけでなく、石弘光先生の財政学や、矢澤修次郎先生の社会学の講義を聴いていた。なかなかおもしろい講義だったというのは記憶に残っているが、どういう教え方をしていたのかというのはいくも覚えていない。先生は、レジュメもなく、自分の好きなことを一方的に話していたような気がするが、それもその先生にしかない魅力だった。

でもそれはもう二昔前の話(十年一昔とすると)。今の大学はずいぶん変わったと感じる。私が大学生だった頃

を設定し、それに対して自分なりの考えを書いてもらう。例えば「家庭を築き、子どもを育てるといふ希望がかなえられる社会を実現するために、あなたはどのようなことが最も必要だと考えますか。」のように。

こうした手法が学生の力の向上に役立つたかは、正直言つてわからない。



■ 学外で講演する筆者

7月に行われた学生による授業評価アンケート(前期分)

は「あなたの学び応援します」なんて謙虚な姿勢は大学にはなかった。「勝手に勉強してください」という突き放した姿勢だったが、全く疑問には感じなかった。今の大学のパンフレットを見ると、良くも悪くも、お客様である学生には優しい。懇切丁寧に学生の学びを導いていく姿勢があふれている。そうした姿勢が社会から支持される時代になっているのだろうか。

大学に求められているものが変わる中で、研究者であると同時に教育者である先生は、学生が三重大学流に言えば「4つの力」を身につけることを親身になってサポートしていかねばならない。そのために、三重大学人文学部では組織的に幾多の改革が行われ、FD活動も継続的に進められてきた。そのことも理解している。ただ、当たり前のことだが、目の前の講義は、自分で試行錯誤しながら組み立てていくしかない。

初めて講義資料を作成し、どう説明を組み立てていくか考えるだけでも結構な時間がかかる。「自転車操業」という言葉が脳裏をよぎるが、妥協はしたくない。この1年間は、講義のベースがない中で、どうすれば自己満足だけでない、学生の力を引き出す講義が

では「この授業に満足できた」という評価を概ねいただき、最低限の役割は果たせたのかなと安どしている。しかし「4つの力」を身につけるのに役立つたと思う」という評価は十分ではない。試行錯誤を続けていかなければならない。

10月からの福祉経済論の講義では、コミュニケーションペーパーを書かせて提出させることは継続しつつ、質問の内容を工夫し、理由も含めて自分の考えを明確化させることを心がけている。例えば「厚生労働省が提示した厚生年金基金制度の見直し案(試案)の内容について、あなたはどう考えますか。その理由はなぜですか。」のように。

また、コミュニケーションペーパーのコメントを次回の講義の冒頭に数人分抽出して紹介することになっている。これは、自分なりの論拠に立って、自分の意見を他人が理解できるように表現することの大切さと同時に、物事には多様な見方がある(角度を変えてみれば違った見方もできる)ということに気づいてほしいという思いから始めたものである。毎回70枚程度はあるコミュニケーションペーパーのコメントを読み込んで、どの意見を抽出するか

できるか、格闘しなければならぬ。

学生の力を引き出すためには、講義の中心に入る前に、講義を通じて学生にどう成長してほしいのか、何をゴールにしてほしいのか、提示することが大事だと感じる。シラバスには、「現在(社会保障)制度が抱えている課題と今後の制度の在り方についての自身の考えを論じられる能力を身につけることを目的とする」と記載しておいたが、これには補足説明が必要である。

人文学部の学生は将来社会保障の専門家になるわけではない。社会保障制度の知識を細かいところまで身につけることは、その道の専門家になる人以外必要ないだろう。むしろ、これからの社会を背負っていく学生には、社会保障を通じて(あえていえば、社会保障の具体的な事象を題材として)社会や経済のあり方について自分なりに考え、それを適切に論じられる能力を身につけてほしい。そんな私の思いを、講義の最初とその後折に触れて強調してきたつもりだ。

そのゴールを目指し、具体的にどのような手法で講義に取り組んでいくべきか。自問自答したあげく、4月からの社会保障論の講義では、社会保障が抱える個別の課題について、何が論点を整理するには多少手間はかかるが、少しでも学生の力になればと願っている。

さらに、今年1月までの講義期間中に、自分で自由に論述式の問題を設定し、レポートを作成して提出させることとした(ただし、問題は社会保障に関連するものであることが条件)。レポート作成を通じて、受け身ではなく、自分で調べ、その内容や自分の考えを適切に表現できるようになってほしい。

学生が大学で過ごすのは長い人生の中のたった4年間である。また、大学に入るまでのバックグラウンドも学生によって相当異なっている。そのような中で、社会に出ていったときに必要な「4つの力」をどうやって身につけさせるかという問題は、大学が組織として取り組むべき大きな課題である。しかし、これは私自身に課せられた大きなテーマでもあると感じている。経験豊富な先生方からすれば未熟者ではあるが、今の自分ができることを一杯果たしていきたい。

(わだ やすのり)

人文学部 准教授

福祉経済論・社会保障論

# 変わりつつある 大学図書館の役割

三根 慎一

大学図書館は、古くから「大学の心臓」と呼ばれてきた。その「心臓」に流れるものは何かといえば、主たるものは図書や学術雑誌に代表される学術情報である。大学図書館は、世の中に存在している多種多様な学術情報を収集、整理、保存、提供することによって、設置大学の教育研究に必須の機関として機能してきた。さらに、これらの収集保存してきた学術情報を検索可能な状態で広く社会に公開することで学術情報基盤として社会貢献をしてきた機関である。

しかし、この伝統的な大学図書館の役割を根本から問い直す状況が現在起きている。それは、学術情報の電子化である。つまり、これまで印刷媒体で提供されていた学術情報が、インターネットに代表される電子メディアによって提供されるようになったのである。最も顕著なものは、学術雑誌であり、2000年頃から電子ジャーナルとしての提供が進ん

でおり、欧米の主要な学会・国際商業出版社が刊行する学術雑誌はほぼ全て電子化された。利用者である研究者および学生は、分野を問わず教育研究に必要不可欠なものとして電子ジャーナルを利用している。電子ジャーナルは印刷版学術雑誌よりも利便性（アクセスの場所が限定されない、本文が検索可能など）が高いからである。

では電子ジャーナルに代表される電子メディアを大学図書館が扱うようになった結果、その役割にどのような変化が生じたのかといえば、現在、大学図書館は、商業出版社や学会が提供している電子ジャーナルへのアクセス権を購入するだけになっている。つまり、学術雑誌そのもののデータを保有するわけでもなければ保存していないわけである。データへのアクセス権を購入しているにすぎないため、契約を中止してしまえばアクセスは原則出来ないことになる。これが何

を意味しているかといえ、学術雑誌が紙から電子媒体へ移行することによって、学術雑誌を整理、保存、提供するという大学図書館の伝統的な役割が、商業出版社や学会に移ってしまったということである。学術雑誌に加えて、ここ数年にわたって話題になっていく電子書籍が本格的に普及するようになったとき、果たして大学図書館の本質的な役割とは何なのか、問われざるを得ない。年間7万点ほどの新刊図書および過去に刊行された図書全てが電子化される



■ 伝統的図書館の例（米国議会図書館）

ことは、近い将来、実現するとは考えられないが、大学およびその構成員に貢献しない機関が、存在し続けるほどの余裕は今の大学にはないはずである。

このような状況に置かれている大学図書館の今後の方向性について、いくつかのものが示されているが、代表的なものとしては、一つは「学習支援及び教育活動への直接の関与」であり、もう一つは「研究活動に即した

支援と知の生産への貢献」である（文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会 研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会 大学図書館の整備について（審議のまとめ）―変革する大学にあつて求められる大学図書館像―）。

学習支援及び教育活動への直接の関与は、最近の自学自習の推奨をうけて、大学図書館が学習を支援するものであり、ラーニング・コモンズなどの学習空間の存在とは言いえない。大学教員の図書館に対する認識、図書館職員との関係、図書館職員の職能など、これまでの大学図書館の延長線上にあるものもあれば、全く新しいものもある。大学図書館側が率先して新しい大学図書館像を大学側に提示し、それを大学側が支援できるかどうか、双方が試されているのではないだろうか。



■ 三重大学のラーニング・コモンズ

の一環として、ラーニング・コモンズが2010年に共通教育校舎（2012年度で閉鎖）、2012年3月に環境・情報科学館に、さらに今年度末に附属図書館内に設置されることになっており、国内大学の中でも、学生の学習空間の物理的整備は、この数年でかなりの程度進んだと言えるのは確かだろう。たとえば、環境・情報科学館のラーニング・コモンズには、PCステーション、グループ学習エリア、グループ学習室、ソーシャル・エリア、相談窓口・就職支援エリアが設置されており、附属図書館機能と一体化することで、学習支援施設を整備し、自学・自習のための空間の創出を意図している。

このラーニング・コモンズが学生にどのように利用されているのか観察調査を行った結果では、学習目的の利用が利用者全体の6割弱を占めているが、非学習関連の行動も常に一定数生じていること、グループ利用が利用者全体の約7割を占め個人利用よりも多いことなどがわかっているようである。しかし、このラーニング・コモンズの機能や全学レベルでの教育における位置づけが、広く大学の

構成員に認知されているとは決して言えないし、ラーニング・コモンズ自体も人的な学習支援（たとえば、ライティング支援やIT関連支援など）は他大学と比較して十分ではなく、今後さらに改善する余地はある。

研究活動に即した支援と知の生産への貢献では、これまで学外で生産され流通する学術情報を収集していた大学図書館が、学内で生産される学術情報を収集・整理・保存し、広く社会に提供していくものである。三重大学もすでに三重大学学術機関リポジトリを構築し、学内で刊行された紀要や学術雑誌掲載論文を登録し、誰もが無料で読めるようにウェブ上に公開する事業を行っている。今後は、さらに研究者の研究活動に関与するかたち、たとえば、研究活動中に生産される研究データ、文献、動画などを蓄積、保存、公開できるようにプラットフォームを構築提供することも考えられるだろう。実際に欧米の大学図書館では、データ・ライブラリーという役職名ができていくほどである。

どちらの方向性に進むと決めた場合においても、大学および大学図書館にとって容易



■ 三重大学のラーニング・コモンズ

整備や図書館員による情報リテラシー教育の全面的実施などがあげられている。ラーニング・コモンズとは、「複数の学生が集まって、電子情報資源も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする『場』」のことである。これまでの印刷媒体、個人利用、静寂空間が中心の伝統的図書館ではなく、印刷・電子媒体双方を駆使し、グループでディスカッションをしながら課題に取り組むことが可能な空間である（実例は写真を参考）。三重大学でも学習支援環境整備

（みねしんじ）  
人文学部 講師  
図書館・情報学

# 人との出会い・言葉との出会い

小畑美貴

「オリンピックに出場して、選手引退後はスタントマンになる。」これが、小学校低学年次の私が抱いていた夢でした。今考えると、小学生にして、選手引退のことまで考えているところが、笑えます。私は、5歳ぐらいから、両親の勧めで器械体操を習い始め、高校卒業まで、体操選手としての生活を送っていました。実は、ロンドン五輪男子体操個人総合で金メダルを獲得した内村航平選手と同じぐらいメディアに登場している名物お母さん、内村周子さんは私の恩師でもあり、中学・高校の先輩でもあります。周子さんや私の通っていた中学・高校は当時長崎県内での連続優勝記録を持つ体操部のある学校でした。その為、中学・高校の先生方にとって、私は「体操選手」としての印象があまりに強かったようで、教育実習で、母校へ2週間ほど戻った際には、「公開授業は運動場でやるの？」

それとも、体育館？」と保健体育の実習生と勘違いされた程でした。(実際は英語だったので、授業はもちろん教室です。)

この頃には、漠然と、私の現在の研究分野でもある統語論(言語の構造を明らかにする言語学の一部)に興味を持っていてのかもしれない。一体この公式は誰が作った(どこからやってきた)のだろうか、公式をどうやって母語話者は獲得したのだろうか、言語によってなぜ公式が異なるのだろうか、このような疑問が、現在の職業へ私を導いたように思います。

今、三重大学で言語学を教えているわけですが、人生とは本当にわからないものだ、つくづく思います。ただ、もしこの子供時代がなかったら、言語学という学問にここまで興味を持ってなかったでしょうし、大学教員という職業も選択していなかったようにも思うのです。私が初めて「言葉」に興味を持ったのは、小学校5年生の時に、東京へ母と2人で引越した時でした。引越しの理由は、過去に多数のオリンピック選手を輩出している、東京の名門体操クラブへ移籍する為でした。残念ながらオリンピックの夢は叶いませんでしたが、この東京暮らしは、私に言葉について考えるきっかけを与えてくれた

る貴重な機会となりました。とは言っても、小学生の私には辛い経験でした。なぜなら...私の日本語が東京では通じなかったからです。それまで長崎市以外には住んだ経験がなかった為、小学5年生の私は、自分が話している言葉が標準語とは異なる長崎弁という方言であることを、全く認識していませんでした。また、テレビのニュースなどで使われている標準語は、もちろん理解していましたが、自分が話している言葉との違いには全く気付いていませんでした。その為、イントネーションが違うことで笑われたり、「(物を)しまう」を「(物を)なおす」と言ったり、周りが静まり返ったり...そんなことの連続でした。大人になった今なら、笑ってやり過ごすことが容易にできますが、当時は、人前で口を開くことに恐怖心を覚えたこともありました。ただ、若さと

は本当に凄いもので、半年も経たないうちに、今度は長崎弁が話せなくなり、また、家の中でも標準語を話す私に、一番戸惑ったのは母でした。今振り返ると、比較的、言語環境への適応力は高かったのかもしれない。小学6年次に、体操の合宿で大阪に1週間程滞在したことがあったのですが、合宿が終わるころには、自分の言葉が大阪弁に支配され始めていました。色んな地

域へ連れて行ってくれて、そして色々な言葉(方言)に触れる機会を私に与えてくれたのが、体操でした。地域に応じて変化する言語環境に、無意識のうちに対応する術を身に付けて行ったのかもかもしれません。

入し、何らかの意味が出力されるのが英語でした。長い英文を見て、どのような構造をしているのか(どんな公式の組み合わせなのか)解き明かすのが、とても楽しかったことを覚えています。

を綴っています。冬は膝まですっぽり埋まってしまう程雪が積もることも珍しくありません。私にとっての初めての海外暮らしは、初めての雪国暮らしでもありました。

達がいいます。私もそんな言語学者のひとりです。子供は母語を「学習」しているのではないということを意図しています。学習によって身に付けた英語は、自分の学習経験を活かして教えることができます。教えてくれた先生がいるから、自分が理想とする教師像を持つことができます。言語学も同じです。自分が教わったように、学生へ教えることができます。言語学者・ノーム・チョムスキーは「言語はヒトに生得的に備わった特性である」と言っています。要するに、日本語(母語)を教えるということは、極論すると、呼吸の仕方を教えることと等しいわけです。ヒトとしてこの世に生を受けた以上、呼吸も言語も、ヒトに生得的に備わった能力なのであり、「学習」を必要とするその他の事とは、一線を画すものであるわけです。言語というヒトのみ与えられた能力の神秘を、身を以て学んだアメリカでの留学生活でした。

その後、中学での英語の授業で、生まれて初めて、「言語を意識的に学ぶ」ことになりました。私にとっての英語は、数学と同じでした。公式に数字を代入し、何らかの値が出力されるのが数学なら、文型という公式に単語を代

また、言語学を勉強する為に留学したアメリカでも、「言語」の奥深さを実感する、印象深い経験をする事ができました。私は三重大学へ赴任する数日前まで、アメリカ、ミシガン州にあるミシガン大学アナバー校で大学院生として勉強していました。ミシガン州は、カナダのオンタリオ州と隣接しており、北海道とほぼ同じ緯度に位置しています。数学者・藤原正彦氏が自身の著書「若き数学者のアメリカ」の中で、「夏と冬だけがミシガンの四季である」と言うほど、冬の到来の早い地域で、藤原氏自身、このミシガンの寒さと分厚い雲に覆われた曇り空の中で、精神的に辛い日々を過ごしたこと

アメリカの大学で博士課程の学生として勉強する場合、学内でティーチング・アシスタントとして、学部生に授業を行うことが一般的です。その報酬として、授業料が免除になったり、給料が支給されたりします。このようなシステムによって大学院生は、経済的支援が受けられるだけでなく、博士号取得後の準備、つまり大学教員としての準備をすることができるわけです。私も2年間、ティーチング・アシスタントとして授業を担当しました。言語学科で開講されている言語学の授業や、アジア言語文化学科で開講されている日本語の授業を担当しました。アメリカへ留学する前に、英語を教えた経験はありませんでしたが、「母語を教える」のは初めてでした。日本語なら思ったことよりも簡単に教えられるだろうと思っていました。しかし、自分が「学んだ」経験がないものを、人に教えることがどれほど難しいか、この時に初めて思い知らされました。言語学者の中には、子供が母語を身に付けることを、「言語習得」ではなく「言語獲得」と呼ぶ人

は本当に凄いです。三重大学に来て、言葉に出会いました。様々な人と言葉に出会いました。三重大学に来て、三重の人々と三重の言葉に出会った今、今度はどんな「発見」が待っているのか、今から楽しみでなりません。



■ ミシガン大学言語学科の拠点 Lorch Hall

また、言語学を勉強する為に留学したアメリカでも、「言語」の奥深さを実感する、印象深い経験をする事ができました。私は三重大学へ赴任する数日前まで、アメリカ、ミシガン州にあるミシガン大学アナバー校で大学院生として勉強していました。ミシガン州は、カナダのオンタリオ州と隣接しており、北海道とほぼ同じ緯度に位置しています。数学者・藤原正彦氏が自身の著書「若き数学者のアメリカ」の中で、「夏と冬だけがミシガンの四季である」と言うほど、冬の到来の早い地域で、藤原氏自身、このミシガンの寒さと分厚い雲に覆われた曇り空の中で、精神的に辛い日々を過ごしたこと

を綴っています。冬は膝まですっぽり埋まってしまう程雪が積もることも珍しくありません。私にとっての初めての海外暮らしは、初めての雪国暮らしでもありました。

は本当に凄いです。三重大学に来て、言葉に出会いました。様々な人と言葉に出会いました。三重大学に来て、三重の人々と三重の言葉に出会った今、今度はどんな「発見」が待っているのか、今から楽しみでなりません。



■ 筆者と博士論文の審査教授陣 共同主査のノーム・チョムスキー氏(左から3人目)、サム・エプステイン氏(右から3人目) 筆者と同じ名前の日本料理店をエプステイン氏が予約してくれました。

# 人文学部が地域に果たす役割

## 公開ゼミ・桑名サテライトカレッジ・出前授業

吉丸雄哉

大学が地域にできる貢献の第一は、学生に十分な教育を施し、社会に送り出すことでしょう。民間企業・役所・

学校などで卒業生がしっかりと働くことが、社会全体をよりよくしています。ただ、これは間接的に社会貢献を感じることです。大学の持つ力の力、それを学生ではなくとも、直接享受することが次のような事業で可能です。人文学部の広報・地域連携委員会は、地域連携・地域貢献のため、公開ゼミ・桑名サテライトカレッジ・出前授業を企画し、人文学部の全教員の協力を得て、実施しております。出前授業とは、高校の要請によって、人文学部の教員が大学の授業を高校生の前で行う企画です。2001年度から三重大学は始めており、



■塚本明先生の授業

重大学は始めており、

五月から三月まで例年およそ六十回弱の出前授業を行います。高校生でない方も、人文学部ホームページの出前授業の欄 (<http://www.human.nie-u.ac.jp/chiki/demae/>) をご覧になっていただければと思います。テーマ概要まで記した出前授業メニューから、各教員の特徴がわかり、人文学部のもつ知の地図が頭に描けるはずで、桑名サテライトカレッジは、桑名市教育委員会との相互連携協力協定にもとづき、2003年度から桑名市教育委員会と共催で行なっている出張講座で、桑名市立中央図書館で一つ4〜8回の講座が毎年4、5件ほど開催されています。広報・地域連携委員会の運営ではないですが、2012年度に上野商工会議所および伊賀市と連携して実施されている忍者・忍術学や忍者古文書の講座も地域に貢献しています。三重大学全学で取り組み社会連携研究センターが実施している「三重大学文化フォーラム」ももとは2001年度から2004年度まで実施された「人文

学部フォーラム」から発展したものです。これらは教員が地域に移動し、地域の人々と交流を深めつつ知の生産をはかるものです。

今年度で八回目を完了した公開ゼミについて、過去の経緯を踏まえつつ、本年度の報告をいたします。公開ゼミはもともと人文学部公開講座を前身とします。人文学部公開講座は1986年度に開始し、2004年度の第19回まで行われました。テーマを設定し、それに関して6、7人の講師でのリレー講義をしていました。外部講師を積極的に招いていたのも特徴です。終了後に参加者とパーティーを開いており、華やかでした。ただ、参加者は最後の五年をみると、登録が90〜60人ほどで、毎回の参加率が約8〜6割でした。期待よりも受講者数が少なかったなどの理由で、2005年度より公開ゼミに移行します。

公開ゼミは毎年9月から12月に行われます。今年は表のように11のゼミ(人文化学科系9、法律経済学科系2)が

開かれました。公開ゼミ初年度は22、2008年度は19とゼミ数が多い年もあれば、2006年度2007年度の10という年もあります。平均で一年につき13・6のゼミが開かれています。講師は一人の場合もあれば、複数の場合もあります。公開講座が料理研究家や太鼓奏者といった多種多様な外部講師を招待していたのにくらべ、公開ゼミではほぼ人文学部内の教員のみが担当するようになりました。

公開講座と公開ゼミの大きな違いは人数です。公開ゼミは原則20名までとし、名称のとおりゼミ形式で授業を行います。一ゼミにつき一回90分の授業が3回行われます。本年度は平日の午前・午後・夜間、土曜日の午前に開講しました。従来夜間のゼミは19時始まりに固定だったのを、本年度より18時や18時30分開始のゼミも設けました。

講師が受講生に語り続ける講義形式ではなく、ゼミナール形式を基本とするので、授業ではあるテーマについて、担当講師と受講者、さらには受講者同士が議論します。また、あるテキストと一緒に解説し、全員で議論することもあります。ただ、すべての公開ゼミの講座が少人数のゼミナール形式で行われたわけではありません。受講希望が増え、実質的に講義形式になっている授業があります。講義形式とゼミ

ミナール形式、それぞれに教育上の利点があります。大学の教育も講義とゼミとで構成されており、ゼミ形式で始まった公開ゼミに、講義形式の授業が自然と加わったことは興味深いです。

参加者は147人で、複数受講者を別々に数えるとのべ319人が受講したことになります。男女比は2対1で、年齢は50から70代が多く、下は20代前半からは80代までの受講生がいます。アンケートでは9割5分以上の方が「満足」「ほぼ満足」と回答しています。約50%の方が津市から来ており、北は愛知県から南は鳥羽市まで、西は大阪府からお越しの方がいらっしゃいました。

公開ゼミは2007年度に無料化しました。有料だった2005年度がのべ118人、2006年度がのべ119人だったのが、無料化のはじまった2007年度にのべ144人、以後2008年度に148人(のべ317人)、2009年度に143人(のべ264人)、2010年度に156人(のべ313人)、2012年度に186人(のべ317人)と多くの人が集まるようになりました。複数のゼミをかける方も少なくありません。

今年度あるゼミでは、参加講師と委員会と共同負担で立派な資料を印刷

し、受講生に無料で配布することができました。「内容が充実していて無料はもったいないので有料化してはどうか」「資料代を徴収してはどうか」というありがたいご意見を毎年多数いただきます。無料化は、学内会計処理上の手続きが原因で受講料支払い手続きが煩雑で不便だったためと、より多くの方に受講していただきたいという願いがあったためです。

多くの参加者が集まるようになり、無料化は成功であり、今後も継続する見込みが高いです。

他大学も含めて、本学でも全体的に公開講座は減少の傾向にあります。そのなかで、人文学部が多く公開ゼミを維持していることは、人文学自体がほかの学問に比べて、一般の方々にも身近で、親しみやすく、人生にうるおいを与えることができる学問だからではないかと、僭越ながら考えております。



■山中章先生引率の实地調査

敷居が低いものの、奥が深いのが人文学の特徴です。公開ゼミから社会人の三次編入や社会人の大学院入学、あるいは科目等履修生が増えるという見込みは当てが外れていますが、人文学部にはより深く学ぶ機会があることをお伝えして、筆を擱きます。

(よしまる かつや)

人文学部 准教授 日本近世文学

# 三重大学人文学部・第8回「公開ゼミ」報告

講座	講師
① アガサ・クリスティの自伝を読む	赤岩 隆 (人文学部・教授)
② アメリカ短編小説3篇	野田 明 (人文学部・教授)
③ 男女共同参画とジェンダーを考える	小川 真里子 (人文学部・特任教授) 鈴山 雅子 (三重大学学長アドバイザー)
④ 地震考古学事始め	山中 章 (人文学部・特任教授)
⑤ はじめての言語学 -ことばの不思議を考える-	吉田 悦子 (人文学部・教授) 澤田 治 (人文学部・准教授) 小畑 美貴 (人文学部・准教授)
⑥ 高リスク社会における中小企業の未来	青木 雅生 (人文学部・准教授) 後藤 基 (人文学部・教授)
⑦ 大規模災害の際の地方自治体の役割	前田 定孝 (人文学部・准教授)
⑧ 贈与と交換について	立川 陽仁 (人文学部・准教授) 石井 眞夫 (人文学部・教授) 金子 正徳 (人文学部・非常勤講師)
⑨ 志摩の海女の歴史と文化	塚本 明 (人文学部・教授)
⑩ 文学から映画へ	大河内 朋子 (人文学部・教授)
⑪ 英文法を科学する!?	杉崎 鉦司 (人文学部・教授)

## 市民講座「忍者・忍術学講座：忍者とは何か」報告

～「忍者」に見る日本の文化・世界の文化～

講座	講師
第1回 忍者の精神	山田 雄司 (人文学部 教授)
第2回 戦国時代における伊賀衆の活躍	笠井 賢治 (伊賀市総務課市史編さん係)
第3回 近世小説の中の忍者	吉丸 雄哉 (人文学部 准教授)
第4回 近代文学にみられる忍者像 -村山知義を中心に-	尾西 康充 (人文学部 教授)
第5回 Ninjaになった日本の『忍者』	井上 稔浩 (人文学部 教授)
第6回 外国人の目から見た忍者	クバーソフ・フォードル (人文学部 留学生)

### 人文学部の研究・教育拠点 「伊賀連携 フィールド」



■ 伊賀上野城

三重大学人文学部・人文社会科学部研究科は、上野商工会議所からの要請を受け、上野駅前前の「ハイトピア伊賀」の三階の一角に地域連携型研究・教育の拠点「伊賀連携フィールド」を2012年6月29日に開設しました。「ハイトピア伊賀」は中心市街地活性化事業の一環として整備された複合ビルで、上野商工会議所はそこに地域振興の拠点として「地域活性化センター」を設け、さらに高等教育機関の機能を誘致することで、伊賀地域の将来を切り開く足場を築きたいと考えられました。伊賀市ゆめが丘の「ゆめテク

ノ伊賀」内には、理系を中心とする産官学連携のための三重大学伊賀研究拠点が設置されていますが、「伊賀連携フィールド」は人文社会科学系の拠点であり、伊賀の地域を研究と教育のフィールドとする域学連携をめざしており、商工会議所、伊賀市と三重大学(人文学部)3者の協力体制で運営していくことになっています。

#### ◆伊賀再発見!◆

伊賀市は、伊賀上野城や碁盤の目状の古い町並み、忍者、鍵屋の辻、松尾芭蕉など歴史・文化遺産に恵まれているだけでなく、農林業や伝統産業に加え、名産品の流通を機に多くの企業が進出し現代的な工業都市の顔をもつ、人文社会科学部研究科の研究対象として広範な関心に広えてくれる地域です。京都、大阪、名古屋として伊勢からも近く、歴史上、非常に重要な地域でした。

「伊賀連携フィールド」の活動は、伊賀を素材にした地域連携型研究、伊賀の歴史と資源を活用した現地型授業を実施することで、大学も活性化し、伊賀の地域振興と市民の活力増進にもつながることをめざしています。

その手始めに、伊賀市教育委員会の生涯学習セミナーと連携して、「伊賀再発見!」(2012年6月～9月、全5回)を開催しました。大変盛況で、伊賀連携フィールドで、地域を「再発見」してい

く意義を確認することができました。伊賀連携フィールドの開設記念シンポジウムでは、高松市副市長(前観光庁国際交流推進課外客誘致室長)に講演いただき、伊賀市、商工会議所、観光協会から、忍者とまちづくりに取り組んでこられた皆さんが、伊賀連携フィールドの部会である「忍者文化協議会」のメンバーとして話してくださいました。初年度の活動としては「忍者」と「まちづくり」を中心に、日本中世史の山田雄司教授とマーケティング論の後藤基教授をはじめ関係分野の教員が調査研究を行い、忍者講座も始まりました。

#### ◆現地体験型授業の試み◆

学生を引率して宿泊研修も実施しています。日本史の学生は伊賀流忍者博物館が所蔵する沖森文庫の資料の整理など、忍術書の刊行に向けた取組みをし、経営学ゼミの学生は中心市街地活性化計画についての聞き取り調査を報告書にまとめるなど、伊賀の文化遺産、社会的な課題について、現実の素材を教材とすることは、地域の文化との関係を深め、学び、研究する動機を強めます。とりわけ、市民講座で明らかになった市民のみならずの伊賀の歴史や忍者に対する熱烈な関心は、大きな励みになりました。また、留学生が伊賀の地で学ぶことは、伊賀を世界に伝えるという点でも意味のあることです。

#### ◆文化を世界に発信する拠点に◆

人文社会科学部研究科ではロシアからの留学生が忍者の研究をしています。市民講座には、忍者衣装を身にまとった方々とともに忍者(忍術)研究家の外国人の姿も見られるなど、世界中で関心の高い忍者ですが、学術的研究はまだ未開拓の分野であり、現在進めている古文書や文献、映画、アニメなどの整理、データベース化により、伊賀連携フィールドは忍者研究の世界拠点になるうとしています。2012年夏に北京外国語大学、中国社会科学部院で開催した忍者の研究会は高評を得、日中共同研究の道がつかまりました。2013年度は6月にモンゴルに出かけ、9月には中国の大学から研究者を招き、忍者文化についての研究交流を計画しています。

伊賀連携フィールドが地域、市民と大学との連携により発展していくよう、今後ともご協力をお願いいたします。

- ・開設記念講演会・シンポジウム「忍者を活かした観光・まちづくり」2012年10月5日
- ・市民講座「伊賀忍者古文書講座」2012年10月～2013年3月(全6回)
- ・市民講座「忍者・忍術学講座」2013年3月(全6回)
- ・公開トークイベント「史実の魅力、小説の魅力」忍者小説の新たな地平」2013年3月2日

# 大学院のご案内

# GUIDANCE

人文社会科学研究科は、人文社会科学の諸分野の高度な専門知識にもとづき、広く学際的・総合的な教育研究を行うことにより、複雑化・多様化する現代社会に柔軟に対応でき、創造的な知性と国際的な視野をもった研究者及び専門的職業人の養成をめざしてします。専攻は地域文化論、社会科学があります。

## 社会人の受け入れを進めています

有職者は標準在学コース(標準修業年限2年間)のほか、短期在学コース(標準修業年限1年間)を選ぶことができます。夜間にも昼間と同じ科目を開講しており、勤務後に学ぶことができます。

## 長期履修学生制度があります

職業等に従事する学生が個人の事情に応じて、2年分の授業料で3年間あるいは4年間履修し、学位等を取得できる制度です。

## 募集人員は、地域文化論専攻8名、社会科学専攻7名と、それぞれ定員を増加しました

一般入試、社会人特別入試(若干名)・外国人留学生特別入試(1名)を合わせた人数です。

### 地域文化論専攻

#### 地域社会文化論専修

歴史学、思想、社会学、文化人類学、地理学、図書館情報学、環境学等の授業科目を幅広く提供することにより、日本、アジア、オセアニア、ヨーロッパ、アメリカの諸地域における社会と文化について教育研究を行います。

#### 地域言語文化論専修

日本、中国およびその周辺、ヨーロッパ、アメリカの言語と文学に関する授業科目を幅広く提供することにより、それぞれの地域社会における言語文化について教育研究を行います。

### 入試方法・試験科目

一般入試	*面接 *共通問題(小論文) *専門科目1科目
社会人入試 ・1年コース ・2年コース	*面接 *共通問題(小論文) *専門科目1科目
留学生入試	*面接 *共通問題(小論文) *専門科目1科目

### 試験日程

2014年2月8日(土)～9日(日)

出願は2014年1月9日(木)～20日(月)

#### 問い合わせ先

人文学部チーム学務担当： ☎ 059-231-9197  
Eメールアドレス： hum-gakumu@ab.mie-u.ac.jp

#### 人文学部ホームページ

(http://www.human.mie-u.ac.jp/) から、大学院生のさまざまなメッセージを見ていただけます。



## 住んで楽しい町/街 小田 敦子

町を判断する根拠として、その町に生まれた女の人が、一生そこに住めるかどうかを考えると元同僚男性からきいた。私は明石で生まれ育ち、津に引越したが、明石は一生住める町だったと思う。町内の公会堂の柿落として、夏目漱石が「道楽と職業」という講演をし、「明石は海水浴をする土地とは知って居ましたが、演説をやる所とは知りませんでした」と失礼なことを言ったが、実はその通りで、電車が明石駅についてドアが開くと、リゾートの風が吹いているのがわかる。風光明媚。畿内の辺境だが、アメリカの友人から、「Lady Akashi(源氏物語の話です)の!?!と目を輝かせて尋ねられるのも、ちよつと誇らしい。

外国に住むならパリだとずっと思っていたけれど、5年前に初めてライブツイヒを訪ねて、一目惚れしてしまった。私たちの観光バスは、バッハが音楽監督を務めたトーマス教会の裏手に止まり、近くには、狼の足跡マークで知られるアウトドア用品の店が見えた。バスのドアが開いて外の空気を感じた瞬間、ここは私の好きな街だと思った。本屋のたたずまいもそこで売られているカードのイラストも落ちていてユーモラス、ド

イツ語を勉強したいと思わせた。ゲーテやシューマン、ワーグナーなど綺羅星のような芸術家たちが生きた街、そこから、東西ドイツ融合の狼煙が上がった。市民の力に支えられ、学芸の花開く街。同じ大学街として(↑)、津にもライブツイヒの風を吹かせるというのが私の密かな野望だ。昨年から大学間協定校であるライブツイヒ大学に留学した学部生もいるので、その芽がない訳ではない。

ライブツイヒのメンデルスゾーンの家で、家の再現に協力した日本人の名前を見た後、ゲヴァントハウスの前を通ると、丁度、コンサート開始直前だった。街に貢献した日本の皆さんの余得にあずかってか、なぜか降って湧いた幸運な招待券で、10分後には、私は指揮者に近い席でメンデルスゾーンの『真夏の夜の夢』を聴いていた。好きなものは応えてくれるのだと確信した夢のような時間。

やさしい風が人々をゆるやかにつなぐ、風通しのよい町に住むのは楽しい。

人文学部教授・アメリカ文化 (おだあつこ)

# TRIO Vol.14

三重の文化・社会・自然  
三重大学大学院人文社会科学研究科 地域交流誌 [トリオ]

発行日 2013年3月15日  
編集兼発行者 樹神成  
編集委員 森脇由美子・江成幸・小川真里子・森俊一  
発行所 三重大学大学院人文社会科学研究科  
〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577  
TEL:(059) 231-9195 (総務担当)  
URL: http://www.human.mie-u.ac.jp/chiiki/trio/  
E-mail: hum-somu@ab.mie-u.ac.jp  
写真 表紙: 鳥羽春祭り(大山祇神社)  
雑感: ブルーデージー  
/撮影: 藤田伸也(人文学部教授・美術史)  
制作 株式会社コミュニケーションサービス

## TRIO協賛企業

三重大学人文学部「TRIO」を応援しています。



### ■編集後記

「TRIO」14号をお届けします。三重大学人文学部もこの4月で創立30周年を迎えます。30年といえば1世代。年月は流れ、いつしか創立時のメンバーのほとんどが人文学部を去られました。もはや新参者とは言えない筆者も、すでに形の出来上がった学部には赴任しています。

鼎談では、武村先生からこれまで知る機会のなかった創設にまつわる話をお聞きし、人文学部にも厚い「歴史」がある、と強く認識しました。多くの関係者の努力、行政や地域の方々の思い、それらの中で人文学部は今日までたどり着いた、30年にはそうした歴史が詰まっています。鼎談の日は9月とは思えない酷暑でした。今はここ数年経験しない寒さ。時の移ろいやすさに改めて驚かされます。短い時間ですが、過去を振り返りながら、人文学とは何か、人文学を教えるとはどういうことか、そんな根本的な問いを自らに向ける貴重な機会を得ました。そして、このTRIOも人文学部の教員、院生、地域の方々、多くの人の力が合わさって歴史を刻んでいってほしい、強くそう感じました。(M)